女學雜誌

第二百五十三號

明治二十四年二月廿一日發

電話交換所の摸樣　細圖入

宮中女官論　中島俊子

巖本善治

英國女王のホーム

漢學辨

第十四卷總目錄添

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 25. FEBRUARY, 21ST. 1891.

第二百五十三號目次

EDITORIAL:—The Female Attendants in the Imperial Palace.
WORDS AND DEEDS:—One's self. Repentance. Woman.
MISCELLANEOUS:—Kangaku ben (Ten chi-shi.) The Phonographic Office (Fumiko). Mr. S. Shimada's view of Music.
PHYSIC:—
HOUSEHOLD SCIENCE:—Her Imperial Majesty of England, (Yukiko).
NOVEL:- Fuunkio (continued) (Unposhi).
HUMOUROUS:—Audiance to the "Aristocratical party."
LITERATURE:—Japanese Poems. (Anzanshi no ya) The Voice of the departed Mother. (Kawai Shinsui) Hikaru Genji Praising the flowers. (Rintei Tanehiko).
ARTICAL NOTES:—"Fujo Shū shin kan. An Educational Magazine. "Salvation Army."
CHILDREN'S COLUMN:—Waters of the pond and of the river.
CONTRIBUTED ARTICLES:—
CRITICAL NOTES:—
NOTES AND NEWS.
CORRESPONDENCES.
CONCERNING WOMEN.

社説　宮中の女官○別乾坤を作るの利何の點にかある
言行　吾が懺悔○婦人
雑録　漢學辨上(天知子)○電話交換所(ふみ子)○島田三郎氏の音樂意見
理學
家政　英國女皇陛下(ゆき子)
小説　浮雲胸第四回(雲峯子)
笑草　貴族院の傍聴
随感　亡き母の聲(川合信水)
文學　和歌數首(東京案山子の家社中)○光源氏花を賞す(柳亭種彦)
批評
兒籃　池の水と川の水(ふみ子)
寄書　敢て世の諸者に告白す(植村正久、押川方義、三並良、丸山通一、巖本善治)○名譽天狗盛岡女子花くらべの批評(天眞生)
時事　天皇の大權○國是は改進にあり○沈默○義犬○議會○救世軍○流球の婦人を歡待せんとす
問答
通信
女報
週報
物價

(1.) *A series of lectures by the leading medical scientists will be given in Tokyo on the practicability of abolishing legalized prostitution. It is desired that, from all parts of the Empire, petitions favoring this subject will be presented to the Diet.*

(2.) *O Uchi Seiran will present a petition to the Diet favoring the abolishment of capital punishment.*

(3.) *Ten students of the Meiji Jo Gakko have lately completed the course in Stenography.*

(4.) *One hundred farmers and their families will be removed to Hokkaido with the view of making their homes centers for the Orphan's Homes to be established there. Mr. Hayashi Taketaro, who heads this movement, is now in Tokyo and expects to visit all parts of the Empire and solicit aid.*

(5.) *A course of study, intended to fit young women for the duties of clerks, is to be opened in the Meiji Jo Gakko. It takes fiv emonths to complete the course, and, arrangements have been with editors and other leading men whereby those who finish it may obtain employment.*

(6.) *In the province of Owari a plan for the support of orphans has been set on foot by Mr. Mizutani Chuko. He propases to collect tenugui for clothing, and small quantities of food from farmers, and thus enable all persons who feel disposed to help in a worthy enterprise.*

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百五十三號 明治二十四年二月廿一日發兌

社説

宮中の女官

宮中の雲漢として深し、素より草莽の臣が得て窺がふ可き所にはあらざる也。左れど照るにつけ、曇るにつけ、吾王如何に坐すらんと思ふは、臣下が情躰なれば、宮中の御摸様の如何があらんと云ふ事は、百姓の夢寐にも忘るゝヿ能はざる所ろなり。此を以て、宮中に仕へ參らせ、至尊に咫尺し奉つる女官の方々は、國內二千万の姉妹が朝夕の理想となり、其裝ほひの何如にして、其振舞の如何があると云ふの細事に至る迄で、一つとして彼等が羨望の上に影響せずと云ふ事なし。宮中女官が一居一動は、日本女學の一進一退に大關係を有すと云はずんばある可らず。

岸田俊子女史、久しく宮中に奉仕す。一朝時事に感激して之を辭し、罷り出でゝより此方、折にふれて坐ろに當日の事を思ひ起す。嘗て吟じて曰想宵立揭御簾手、岳雪終朝題何看。深く女史を知るものは、女史が此感の何如に切なるかを味はひて餘りあり。近ごろ、左の一文章を草し、世上の大方に問はんと欲す。大意、宮中の女官を獨身者とするとの不可なる所以を辨じ、之を男性と同じく家より通勤せしめんヿを望むにあり、而して若し之を直ちに實行しがたしとせば、宮中の女官は、嫁期前の乙女と、寡居の未亡人とを以て之に充て、所云る「女官が奉仕の命を帶ぶるの日は、即はち終生獨身にて果つるの決心を爲すべきの日たる」が如きヿ莫らしめんヿを欲するを旨とす。此論を爲すもの、宮裏に於ける經驗淺しとせず、而して今ま如此く發言す、衷心の情察すべきものあり。其議の必らずしも行なひ難きに非ざるヿ、亦た明らけしと云つべし。

吾人は太たく此の主旨に同意を表し、單り世上の大方のみならず、內省當路のつかさ人等も亦た耳を之れに傾たむけんヿを願がひて止まざる也。昔しは、俗に十二后など云へるものを置ける例しもありつるが、今の文明世界には固とより斯る奇怪の事あるべしとも思ほへず。官員錄を窺がふに、掌侍、典侍、權典侍、など云へる女官多し。恭やしく察するに、蓋し侍官、近侍の如きものか。果して然らば、必らずしも獨身者たるヿを要するにも非るべし。止を得ずんば婚期前の少女

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

もしくは、形骸僅かに存し、戀愛すでに同穴に埋もれたる未亡人にして、事足るべき歟と思はる。雲の凝つて雨となり、下つて天下を潤ほすが如く、宮裏雲上の風は、四方に吹渡つて、万民を化するの源となる。天下の治は、家の齊ふより起り、家の齊ふは、先づ宮室の美なるに淵源す。左れば、宮中に孤棲の女多くして、天下に和樂せる妻多かれよと望むと能はず。日本の高潔なる女風は、至尊に近侍し奉まつりて、日々に恩化を蒙むる事の尤とも濃厚なる人々より、先づ發作せずんばある可らず。如此き主旨を以て、吾人は太たく、俊子女史が新意見を賛成す。

別乾坤を作るの利何の點にある

中島俊子

人は現在に居つて現在を樂しむより、前途の希望を樂しむの情念却て強きものゝ如し。到達せし今日、多くは是れ曾て希望せし前途にてありしならん。既に到達すれば、希望路更に路を生じ、青山白水其到り留るところをしらず、殆ど人をしてこゝまで來たれ醴酒飲まその感あらしむ。生命限りあつて希望限りなし、限りあるの生命、限りなきの希望を擔ひつゝ、此の世を去るの已むなき場合少なからず。前者の希望を擔つて逝るを觀るの後者も、また猶其轍を覆んで、果すべくもあらざる希望を有す。希望たとひ果すべからざるも、人に於て何の憾みかあらん、果し得ると得ざるとに論なく、希望は恰も人間の糧なればなり。是に於て、仁者は今日爲すの仁より、前途更に仁に進まん事の希望を有して飽かず、富者は今日有するの富よりも、前途更に富を重ねん事の希望を有して已まず。幼にしては、望を壯年時代に屬し、壯にしては、望を老成に屬し、老て終に望を身後にまで歸す。希望固より人に於て其度を異にすと雖ども、終生希望と相遠かることなきこそ、不思議なれ。家に雇ふところの僕婢齊しく希望を有す、今や二圓たらずの給金に膝を屈するも、いつかは、この膝を伸して、他人の膝を屈せしむるの日あるべし、其時こそはこのはつぴ股引も、黄八丈の下着紋附の羽織を穿つべきかなと、希望する下僕もあるならん。夏の日はまだしも、寒風凜烈のときには最も惡らしく感じる臺所板間の部屋も、早晩鼎鳴り爐火紅ひの窓、軟かき閨の上、針さしに親しみ、愛らしき子

女の新衣を裁するの日もあらんか、其時こそは今日赤切れ疼瘯に輕蔑せらるゝこの手指、必ず金環のきらめく事あるならんなど、希望する下婢のお鍋あるなるべし。これらの希望を有する婢僕を使ふものは、使はるゝ婢僕より更にたのしみを有するなり。權や、お前も出世して供の一人もつれて來れよ、其時は屹度御馳走せん、お鍋よ、お前が世帶を持ちしときは、何を祝ふべきぞ、今から注問しておくこそよからめなど、打集ふときの串戯も、いと興多きものなり。人は唯おのが希望をのみたのしむものに非ず、他人の希望をもたのしむものなり。若しわが家に使ふところの下婢にして、終生、夫を持ち子を育し、家を爲むるの念を放棄せしものにてあらんか、使ふものは、只氣の毒と可憐の情に堪へざるべし」。これらの情を以て推測するには非れども、余が折々想ひおこすは、宮仕ひし玉ふ多くの女官の君にてある。其衣を錦にし、食を玉にするが、終生の希望にてありせば、已まんのみ、若錦衣玉食が其希望に非ずとせば、希望果して何の點にあるか。官職の昇級にあるか、望み全くこれなきに非ず、されど權女嬬の君が、女嬬に昇り、權命婦の君が、命婦に昇り玉ふの類のみ、これらの昇級も、十年乃至十五年を經過せしのちに非れは、能はざるもの丶如し。寒夜深殿人定て、廊下を照すあみ行燈の影、將に痩せんとするとき、宿直の同僚三四、眞鍮の丸形火鉢を圍み、低聲、談偶ま家山の事に及べば、互に指を屈して、幾年の後こそ、目出度隱居仰付らるゝの時なりなど耳語くなるべし。この隱居年齡の到達は、其身にとつての希望峯たるに非るなきか、而してこの指を屈するの女、多くは是れ芳紀廿をすぐる太だ多からず、雲鬟花顏は獨り麥華の照すあつて、空しく希望峯に達せんことを望むの情こそいぢらしけれ。其希望峯は齡六十、齒おち眼かすむの秋にてある。漸く希望峯に達し、目出度故山に歸れば、親戚朋友多くは鬼籍に入り、故山また舊時の故山にあらざるを奈何せん。是を以て觀れば、女官の身もまた憐れならずや。然れども、女官にして中途職を辭するもの、極て寥々たるを以て考ふときは、また別にか他人の解し得さる歡天地のあるあらんか、又別に慣習の已むなきものあるならんか。獨り怪しむ、女官が奉仕の命を帶びるの日は、即ち終生獨身にて果つべきの決心を爲すべきの日たる如きを。而してまた怪しむ、獨身を期するもの耳を群と爲し、全く世態人情と相隔る別乾坤を作るの利、何の點にあるかを。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

言行

○わが懺悔

しのぶ

吾れ禽獸と異なりて、天地の美妙に感じ、古今の正義に胸を躍らせ、宇宙に圓滿せる偉大の靈性を崇むるの心地せり。かくて、久しく四方に揣摩し、全心を寄するに足る所ろのものを索めて遺す所ろなかりき、或時は英雄を崇拜したり、左れど英雄にも亦た吾と同じきの弱點あり、或時は山川草花を愛したり、左れど彼等冷やかにして吾に厭足ぬ心地す、或時は孔孟を推尊したり、左れど孔孟はわが心の半を引寄せて未だ全く魂を招かざりき、或時は迷々して凡俗の宗教に歸依したりき、醉の醒めたるが如く覺り來れば、われ乍らうら恥かしうして宮殿を再たび見ると能はず、あゝわれ何處に歸せんと。叫ぶ所ろの聲悲しきが故に、鳩は同情を表してわが傍らに近づき、雀は恐れ氣もせず舞ふてわれを慰さめたり、夜の星閃々として天に消へざるの光あるとを示し、義の太陽は極めて明らかに榮光を射出したり。わが心ひそかにさゝやきて曰く、天に神ありと、樹梢の風さゝめきて曰く、到る處ろに神ありと、打寄する波音高らして曰く、水も亦た神の御手に動かさるゝと。此に於て野に出でゝ花を見れば、花はほゝえみてわれに然か思ひ玉へと說すゝむるの狀なり。斯て后ち古今聖賢の言へる所ろを味わへば、彼等亦皆な同じく悟りぬ、グリーキの哲學者も、支那の聖人も何れが衷心に於て其の感を得ざりしものあらん。われ遂に大敎師クリストの言ふ所ろを聞きぬ、其言葉は論にあらずして確かめなり、未だあらざるの勢威を以て明らかに秘奧を辨じ、わが靈性の底に兩刃を通して、全心に確信確認を得せしむ、全身躍ひ動き、あらん限りの聲を發し贊美して曰く、天の榮光、地の和平、とこしへにわが主を顯はす、われは光を得たり、われは生命を得たり、われは道を得たり、われは君を得たり、われは父を得たり、あゝわれ他に何ものをも求むるとなし、いざ全心全身を獻げて、之を崇め奉まつり、愛し奉まつり、仕へ奉まつらん。此に於て天地の景一變し、困難辛苦すべてわれに善からざるなし、われは化するにも、難むにも、泣くにも、憂ふるにも、常に神子たるの榮えを現はすとを得ん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○婦人の戀愛　イルビン曰く、戀愛の事を思慮するに當つては、女性は男子よりも用心する所ろ更に深し、何となれば、愛は是れ彼女が一生の學問なり事業なればなり。

○大事件　リットン曰く、ヲー女なよ、常の時はたゞ死すべきの人間なるを、大事件、非常事件に於て、何如に汝は忽焉大化して天の使となるよ。

○三樣の婦人　シェクスピア曰く、婦人をして誇らしむる所ろのものは、其美なり。婦人をして尤も多く人の尊敬を得せしむるものは、其德なり。婦人をして聖淨神潔に見えしむるものは、其操節なり。

○正婚　孟子曰く、丈夫生れて之が爲に室あらんことを願ひ、女子生れて之が爲に家あらんことを願ふ、父母の心人皆之れあり、父母の命、媒妁の言を待たず、穴隙を鑽りて相ひ窺がひ、牆を踰て相從がはゞ、父母國人皆之を賤まんと、末段の事固より宜しからず、左れど、媒妁の言、父母の命のみ必らずしも緣を定むるものにあらず。孔子曰く、誰か子を養ふことを學んで而して后ち嫁せんやと、則はち之を學ばずして婚するを正路と爲すのみ。右の聖賢が言ふ所ろ往々如此し、必ずしも直ちに今に用ゆ可らず。

雜録

漢學辨（上）

天知子

予は嘗て漢學鄕里の旅行者なりき。顧れば好奇の癖物なるかな、嚮に日本天下橫文字を崇拜し、竪文字あわれに蹂躪られたる時、實に教育世界に英學小僧らしく大將ぶり、忠實恩顧の漢學は生意氣通者の爲めに殆ど死に垂とせしに當り、予は慨然として一轉、扨てこそ漢學鄕の寂寥たる原野に杖を曳き始めしなり。鳴戶、森田、有井諸儒の門を叩きて、經書、道書を攷古屋に漁ぐの冥加世界に濶步し、時納れられずして慨死せる、英雄の遺骨を此淋しき古戰場に探ねつゝ、須氏の不可思議說を老子の玄々にて接待、密氏の代議論を韓非子の確言にて確め、伽氏の熱血文字は陽明の奇骨章句にて論じ、英詩の天道的ビューチーは、漢詩の形容的サブリミチーもて對賞し去れり。而して此旅行中に得たりしものは何ぞ、唯、漢學の長所と短所とを僅かに窺ひ得たりしのみ、今此旅行日記を繙きて、學ぶ乙女に知らせまほしく、大學は諸學問に入るの始めより、漢學鄕の栞となすよしもがな。

五

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

字句拘泥

漢學は徒らに字句に拘泥といふ非難は一般に囂し、尤もなり。過つる極端實利の乾燥時代には殊に尤もなりし、文學的の眼を以て見れば、一種の風韻は此字句間に、靄然と霞棚引き來る所なれど、餘りに拘泥過ぎたる弊ありたるに相違なし。實に此大弊害は漢學の進步、即ち支那文明の潮流進步を妨げたるものにして、其由來抑も深し。乙女子知れりや、聽け。秦の始皇帝が "Wax fat and kick" (馬肥ゆれば蹴る) てふリセリツの眞理を案出せる愚民政略より、終に天下の大文字を阿房宮前一片の烟と爲したる後、幾多の星霜を經て恐ろしき老人、河南の一隅に福成と名告りて嘯き出たり。杖を叩いて能く經書の萬字を暗んじ誦す、則ち是を編みて出版するもの之れ今文也。然るに程經て孔子の子孫が住みけるといふ家の壁より塗り隱し置きたる經書顯れ出たりとて、更に是れを出版す、名付て古文と言ふなり。此頃追々各所より續々として隱れたるもの出たりとて出版し、各々其眞僞を爭へり。去ける所終に此古文と言ひたるものも全くは僞作なりと決するに至りぬ。此に於てか支那天下の學風一變し、代々の學士等競ふて古文今文の相違せる字句を研究論議し、各々一派を立て、徒らに何々字畫の小細工學者と成りて、學理の精髓は全く荒敗するに任せたり。ベーコンが痛論せる最下の學弊時代と成りて、終には堯典最初の四文字を辨ずるに二千言を用ひ解くに十万字を費すに至れり。此暗黑潮流は滔々と流れて止まらず、程氏、朱氏慨然として大に改革の氣焔を吐きしと雖ども、此恐るべき學弊は長驅して日本へ渡來し、幾多の腐儒を蘇生せしめて漢學頗る無用の死灰と成り、終には松陰先生をして、借問す浪華の變新詩幾編成る、と長嘆せしむるに至れり。此派一流の學者は共に漢學の大勢を論ずるに足らずして、現今文學上の師父とすべき者には非ずかし。學ぶ者宜しく此點に心して、ゆめ舊思想、陳腐眼に發達を妨げらるゝ事勿れ。字句拘泥の弊害出て來る事斯くの如ければ、固より漢學に追隨するの弊なりと言ふを得ざるべし。明治の大撲與は文學上に無味乾燥の空氣を反動し來らしたりけるか、漢籍恐く繁冗文字とせられて、實利文學漸く起り、再び文字論の世界と成りて、一時は假名の會といふもの出で來、物好きなる羅馬字會起るに至りては、心ある者呆然、啞而して苦笑せり。今や精好なる文學起り來らんとするに際し、聊か漢學の爲めに辨ぜずんばある可らず。

電話交換所

ふみ子

工女「何番へ——アナタモット大きな聲をなさらないと聞へません——————此處は電話交換所ですよ、百一番——宜しいサア繋ぎ升たお話しなさい。

「何番へ——二百番——二百番は今外で話升から、少しお待ち下さい。

なんどいひながら、瞬く間に數件の電話を取扱ふさま熟錬したるものなり、勞力は要せざれど、耳目手腕餘程敏捷ならでは出來ぬ仕事なり、男子よりは女子の方、音聲鋭く、又指先の働き自在なるを以て、善しといへり、女子も年長けたるよりは、十五六歳位の方、尤も此仕事に適するよし、現に全所に働き居る工女も、少きは十五歳位、長けたるも十八九歳を超へじと思はる、加入者三百軒に、對し、六人の工女にて、晝夜交代し、日に二千件程扱ひ得るとぞ、其賃金就職の時間などは、曾て本誌第二百四十四號の紙上に載せたれば、就て參考せらるべし。茲に掲ぐる圖は、全所機關室の摸樣を、社友神中糸女史が實際に就て摸寫せられたるものなり。

圖中(イ)は、木製の箱にして、其縱横に區畫あるは、加入者の數に割當て丶、番號を付記したる、眞鍮の札を、三百個列ねたるものなり、（今加入者三百人あるを以て三百となり居れども其數の増すに隨ひて其箇を殖すを得べし）而して其眞鍮の番札は、外部を黑色に塗りたるものにて、第二圖中の(イ)に示すが如く、開閉自在なる蓋ありて、其蓋を開く時は、中に順次一より三百までの番號を付記したるものなり、此札常には閉ぢられて、只其外部の黑色を一樣に示すのみなれ共、其裏面には一個毎に電線の接續するありて、各加入者の家に通ぜり、故に、今加入者中他の加入者と、談話をなさんと欲する時は、己が家に通じ居る線の離れたる兩端を付着す、此に於て陰陽相和せんとし電氣彼方に通ずるとと知るべし。然る時は、其人若し二百番の人ならば、此交換所の箱に裝置したる札の一ッは、自然に其蓋開けて、中より二百番てふ番號を示す、(但し此仕掛は、只だ本局のみの事にて、各分局又は通信者の家に對して、本局より最初話しかくる時は、矢張り同樣の手續によりて先づ電氣を通ずるや否や、彼方に備付たる合圖の鈴鏘然として連鳴し、注意を呼ぶの工夫となり居るなり)、依て工女は直樣自己の前に垂下しある話しの口(ロ圖是なり)に口を當て丶其二百番なる人に向ひて、何番へ談話せんと欲するかを問ふ、是に於て其人は、五十番ならば五十番と、其話んと欲る先方の番號を答ふ、工女は其報告を竢て、(ハ)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に示す番號（（ヘ）も（イ）と仝じだけの數を備へ（イ）の番號に合して、其號を付したるものなり）を見合せ、二百と記したる處の穴（（ホ）並なり）と、五十と記したる處の穴に、電線（ニ）と（ホ）とを挿入す（此（ニ）と（ホ）とは陰陽二種の電線にして一方は赤一方は白の糸を以て之れを卷き（ヘ）の處にて相接續せしめ（ミ）の鋼鐵を付けたるものなり）然る時は、二百番と、五十番との間に電氣流通し、互に談話をなし得るやうになるなり。

要するに電話交換所にありては、最初其依賴者よりの依賴を聞き、其求むる所の家に談話を通ぜしむるの媒介を爲す迄のものなれば、甲と乙との間に、傳話の作用を、起さしめたる上は、最早關渉するを要せず、直に次の請求者の依賴に應ずる事を得べければ、壹人にて大凡そ百軒位の加入者を受持つ事を得るなり（但百軒を受持つとも百軒一時に談話するやうの事は決してあらざれば大概全時に數軒宛談話する位なり）聞中（チ）は聽音器にて、工女は絕えず之れを右耳に密着せしめ以て依賴者の談話を聞くに供し、左耳には何ものをも付けずして、工女相互の談話若しくは、室内に於る用談を聞き得るやうになせり。

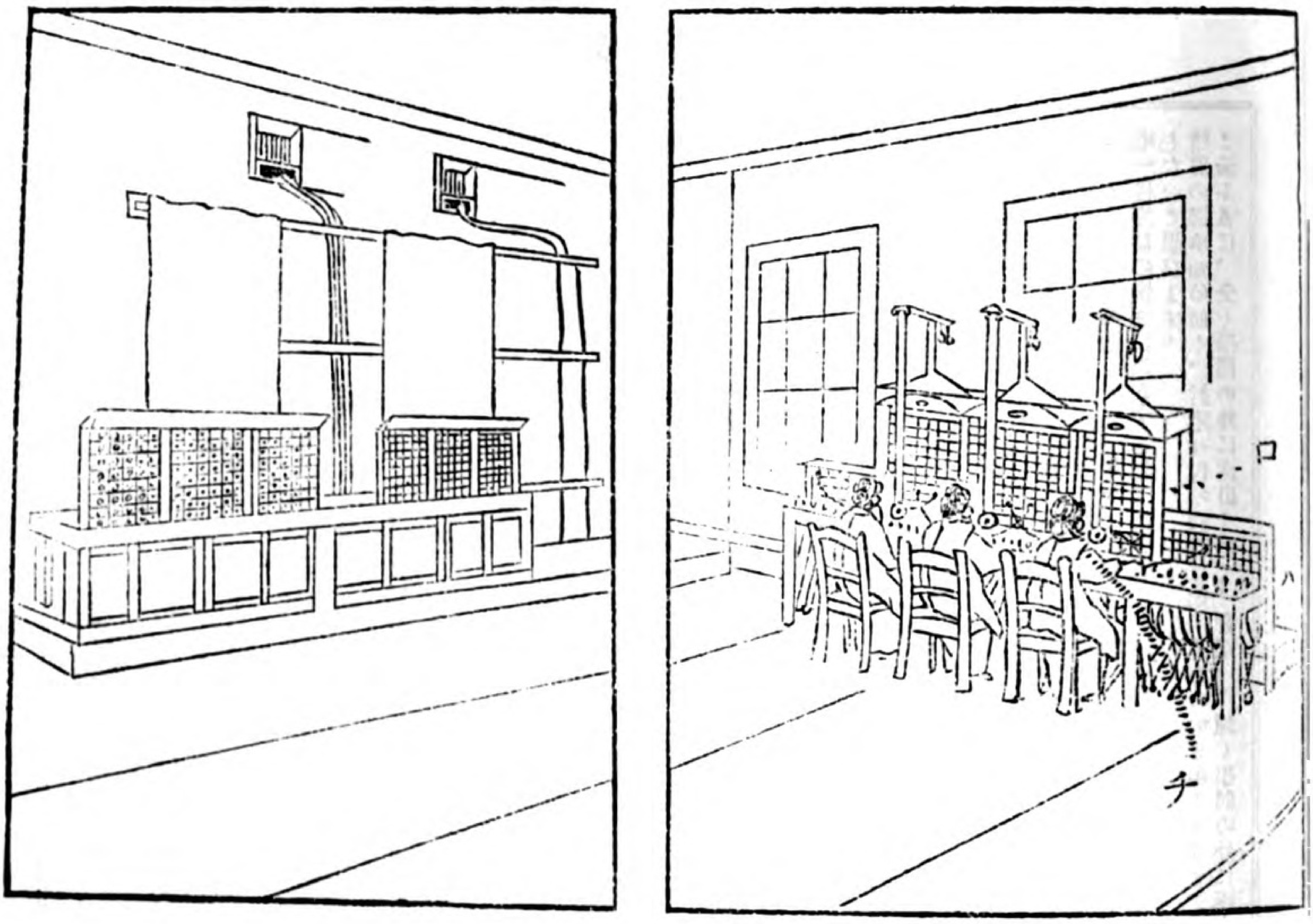
以上陳ぶる所は、龍の口の東京電話交換所（本局）に於る模樣なるが、此他各區に一個づゝの支局あり、其支局は、公衆の需めに應じて、五分時間十五錢宛の割合を以て、加入者中の或る人々に對して、談話を爲さしむ、故に假令己れは加入者に非ずとも、其談話せんとする先方の人加入者ならば、其家に到らざるも、自己の最寄の電信局内に設置せる電話交換所に至り、電話を爲さんと求むれば、自由に談話を爲すを得べし。

但此電話を爲す時に注意すべき事は、談話中話頭の轉ずる時なり假令ば今迄商買上の話しを爲し、次に家事に關する話しをなさんとする時などは、是より家事の話に移り升よと、告げ置くを要す、左なくては、前の談話と、後の談話との區域判然分らぬ嫌ひあるよし。

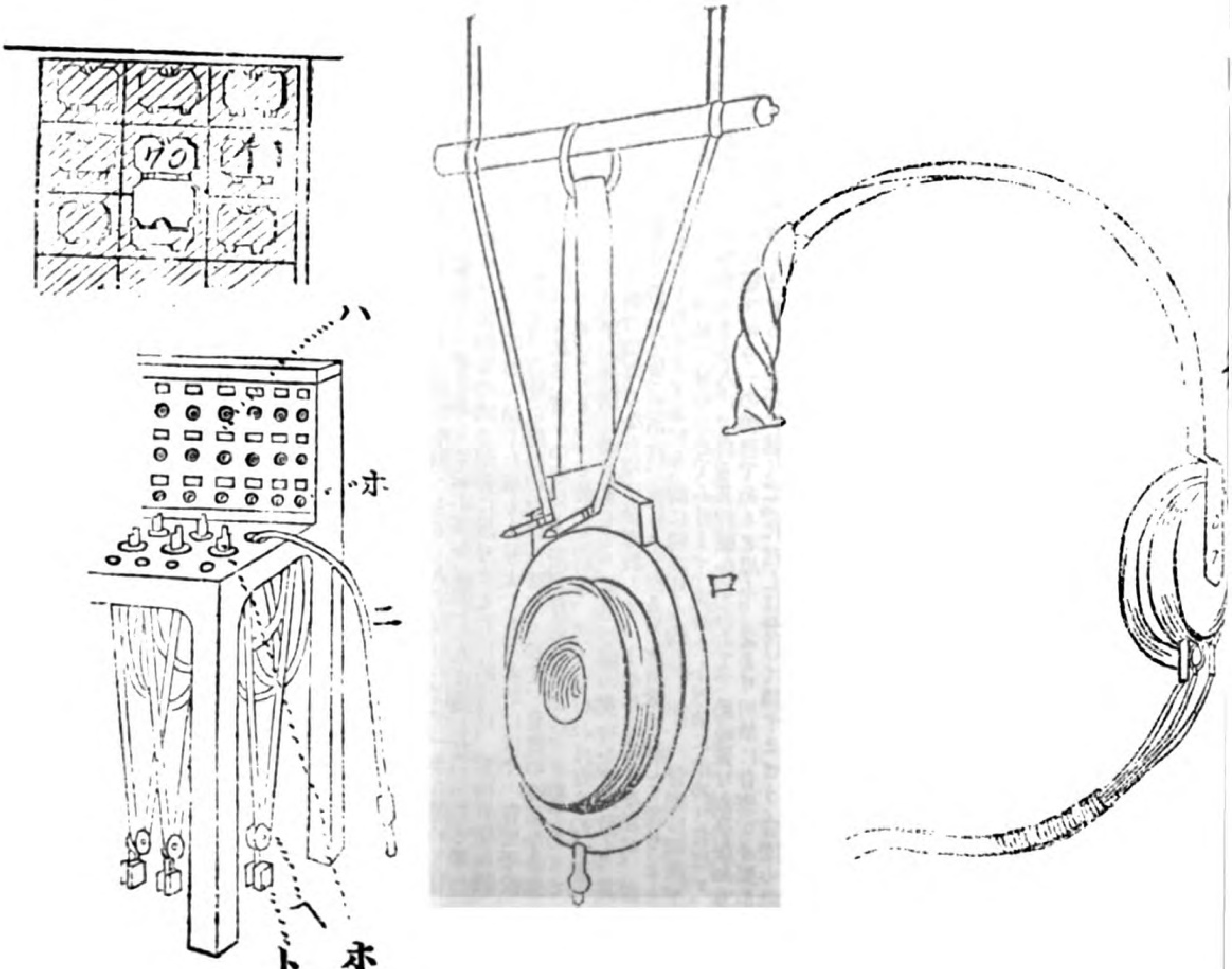
電話に就き一二面白き笑話あり、此間甲の男子、朋友を誘ひて、宜しからぬ處へ遊びに行かんと思ひ、乙の家へ電話を通ぜしめ、細君には內處にて、云々して出來り玉へといひつるに、折惡敷乙の細君夫に代りて聽音器に耳を付け居ければ、此談話を聞て大に腹立ち、時ならぬ風波を家内に惹起しけるとぞ。又或る時は加入者中の男子、電話の請求をなしつゝも、何番へと問ふ聲の女なるに依り、あなたはお幾つ？、お名前は……などゝ問て、良しなき手間を潰すものもありとかや。

且つ夜間事務の閑なるときもあれば、電話を通じ置く商店の子僧と子僧とは、數里を隔てゝ、まだゝく間に冗談をかわし、目に見へる破れ壁にて互ひに言募り、已れとつかみかゝれば

第一圖



第二圖



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

相手は二三里外にあるなどの奇談亦少なしとせず。今は東京市中、横濱との間に、設置せられたるのみなれども、追々に之れを各所に通ずるやうにすれば、極速の諺迄なりにし電信よりも、更に便利迅速ならんと思はる。

學理の説明は之れを理學の專門家なる、社員吉田伸子女史に托して、次號の紙上、理學欄内に於てすることゝし、玆には只表面に現はれたる作用の概畧のみを記せり、乞ふ不分明の廉は、之れを次號の紙上に依りて、推考し玉へ。

島田三郎氏の音樂意見

左の一篇は、島田三郎氏が二月十一日東京音樂學校紀元節祝賀式に於て、演説せられたるものゝ速記なり。事頗る女性に關し、殊に音樂學校存廢の議論、朝野に囂々たる今日、立論精確、引證警拔なる此演説は世上志士が三顧の價値あるものなりとて社友吉田駿逸氏より寄送されたれば玆に掲ぐ

列席の方々に申します今日紀元節の式を行はるゝに際しまして私に一場の演説をしろと云ふ校長の御委囑で、私の一身にとりまして光榮と存じて早速承諾を致しましたが、併し承諾を致した際に一の困難を感じましたのは、私は此音樂の事に就ては性來不適當なるのみならず、最も恥づべき經歴を以て居ります。斯の如き人となり、斯の如き經歴を以て居りまする私が、專ら音樂を修めらるゝ方々の前に於て、音樂の事に就ゝ話しをすると云ふ事は、甚だ不適當なりとの感念が最も深いのであります。併し乍ら、或は私の考が御參考の種にもあらうかと云ふ一の頼みを以て、諸君の前にて、僅の時間を拜借を致すより外に、義務の致し方がないと思ひます。之より性來音樂の事に就て不適當であり、恥づべき經歴を、以て居ると云ふ事を御話しして、其次に音樂の人間社會に於て必要なる者で、世人が唯一種無益の娯樂に過ぎずと思て居るのは、深い誤りであると云ふ事を御話し致したいと思ひます。

諸君の御承知の如く、封建時代の教育は如何であるかと申しますと、學術の思想と云ふ者は、全く學問の外に逐出されて、音樂の思想も學問の外に逐出されてあつて、歴崗の政事を執る藩、或は極手堅き家内にては、音樂を其藩の内に入れず、一家の内に入れぬと云ふので、一藩一家の風俗を維持していつたのが、昔しの有樣で、亦止むを得ざるの儀である。古るく溯れて見まするに、凡そ國の東西を問はずして、音樂は教育の中の最も要用なる者である事を、皆教育家は考へて居る、然るに我國封建時代には、如何なる譯にや教育の世界より、音樂の思想、唱歌の思想と云ふ者を、全く斷つた者である。昔しの教育を受けた有樣は、四書五經と云ふ者より、進で或は史記左傳と云ふ者を教はり、意味を解し書物を讀むのが、教育の領分を占めて居りました、是等が善く教育を受けた人々でありまする此時の教育には、音樂の教育は丸で省いて居りましたから、世間の教育なき社會に、卑俗の音樂が行はれて居りました、所謂教育種類の音樂のなかつたので、誠に未熟なる教育で厶りました。私も此教育を受けた部類に附いて居りますが、不幸にも音樂の思想と云ふ者は、少年の時即ち思想の成立つべき時に、取除けられたる所の一種の人の中に屬して居ります。之より世の中一轉しまして、西洋の文物を引入れて、明治六年に施行せられました學制の中にも、飜譯を致した草稿には、音樂を普通の學科の中に入れておいた。さりながら此學制を施す役人は、封建時代の教育にて生長した人達ですから、音樂を教へらるゝ人でなければ、一歩を進めて音樂は、教育の一部に緊要なる者であると云ふ事を、感じた人は盡しなかつたと考へる。私も十餘年以前には、文部省の或る部分に居りましたに就ては、當時音樂取調所長伊澤君と、机を並べて時務を論じた事も厶りました。其時には今の音樂學校長は、師範學校長であつて、音樂の學科がなければならぬと、音樂の擴張を主張されましたが、其時さへも私は、音樂の學問上、所謂普通教育上に、必要であると云ふ事の感覺が鈍くして、夫よりもちつと外の學科を、奬さなければならぬと思つて居つた。其後に至りて三年前外國に參りまして、彼の諸國の文物を實驗致し、其より以前に考究したる教育論なども實地に參考致して、十餘年前の事を思ひ、誠に音樂の無用であると思つて居つたのは、誤りである事を自分に感じて參りました。斯の如き經歴の者でありまするから、前に御謝りを致した如く、音樂に關係する演説を致す事は、勿論私一身の意志で厶ります。夫故之を理論に求めて音樂が、教育上必要なる事を知らざる人に、自ら其經歴を引出して、此必要なる事を知らしむるは、世の爲に盡す可き一の義務であると思ふ。之より何故に音樂が必要なるかと云ふ事を申しませう、此事に就て二つに私しは分けて論じませう。音樂の教育上に關係しての事、及一般の社會に關係しての事と、二つに分けて論じませう。元來我國の教育上に、算術の思想のなかつた事、並に音樂の思想のなかつた事には、如何にして斯様な有樣なるやと云ふ事を研究しませう。

御承知の如く我國の教育は、支那の學制に取つた者で、支那の古代の學制は六藝と申しまして、孔子の三千人の門人の中、六藝に通ずる優等の者が七十人あつた。此六藝と云ふ事は二つの解釋がある、一つは六經と云ふので六つの經書を善く明らめたと云ふ人と、一つは禮樂射御書數と此六つの藝に通じた者が、七十人あつたと解釋する人が厶りますが、私は矢張六つの藝と云ふ事が相當だと思ひます。そして支那の數學音樂は、教育上に就て最も立派なる位地を占めて居る、昔古今の帝王が支那では尊崇する孔子は如何なる者を以て教育したと云ふと、數學並に音樂を必須科の中に入れて居つた事は慥である。又此音樂は、孔子が新に揷込んだのに非ずして、堯の世舜の世抔に專門の音樂の教育をなす者を置た事は、書經の中にあります。凡そ人間が世の中に成立ちたると同時に、不完全ながらも音樂の種類が成立つたに違いない、併し乍ら夫が段々發達して、之を樂器に合せた事に至つては、開けた時でなければならぬ、其初に遡りて見れば、分り悪い事で厶りませうから、書

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

物に依りて考へて見ますに、支那の古代の聖人だと云はるゝ所の黄帝と云ふ人が、鳳凰の鳴くを聞いて、籥を造った事が史記に出て居ります、嶰谷の竹を以て笛を造って、黄鐘の音に合せ、伶倫と云ふ者に命じて之を學ばしめた、だから伶倫は音樂に委しい人であったと思はれます。其以前無論粗末な音樂が成立ったに違いない。書經の堯典舜典を讀みますれば、夔が樂政を執った職が分ります。昔の教育を受けた人が、最初に讀む大學の序に、典樂の職を設くと云てある、其後になりますと、有名なる事業家、才能家たる聖人の名を受けた所の人が、音樂の器を取て之を以て天下を誘導した。舜が南風を歌うて天下を治むるのが、歴史上の證據のある事である、此禮と樂とを以て天下治まると云ふ事も、支那の學者の皆說く所である。凡そ天下を治むるに、四つの大切なる者があります、體樂と政と支那の學者が申します。此四つを以て天下を治むるのが先王の道だ、然ば支那の古代の學制を考へ、政治のやり方を考ふれば、斯く迄禮樂を重じたに拘はらず、其學制を我國に入れた者は、禮の尊ぶべきを知て、樂を世の中の實事に施す考の出なかったのは何故であるかと云へば、所謂正き音樂が成立たずして、俗曲が天下に横行した事で有うと思ふ、凡そ物事は勢強き者は勢強き利益を與へ、又た勢強き害を與へる事は自然の理である、樂は人心を動かす事に勢力ある代りに、此の樂が宜しきを得なかった時は、非常な害を受けなければならぬ。只今世の中に成立て居る此俗樂は、甚く可き悪い結果を世の中に與へた、音樂の勢力は利刃の如く、鋭きもの故、其人を利すると同時に、人を斬る丈の力は、餘程強い者であらうと思ふ、不幸にして我國には、古代の音樂が朝廷の間に行はれて、儀式の時のみに用て來たに過ぎぬから、跡の空き場所は丸で俗樂の世界となったから、此害を恐れて封建の學風がありたって、儒者こそ音樂は教育と別居せなければならぬ結果となりました。夫故深く學制を考へた人は、力乏しく世の中斯の如き勢を變ずる程の力を盡す事が出來ない、爲めに、腦中にありて實地に顯はさずにしまった、元祿時代儒者と云ふ者は、支那の古代の政治のやり方を考へ、夫等の人の書いた書物は、大切なる事が書いてある。彼の荻生徂徠の如き、世の中を統御するには禮樂は必要である、正人も樂を起さなければならずと云ふ事を、其著書の中に載せてあります。其門人での太宰春臺の書物には、此事を論じたのみならず此人は自身に音樂の堪能の人でありまず。斯の如き卓見を以て居た人は、支那の教化に音樂の功ありし事を認むるのみならず、どうかして之を實地に施さんと爲したることは、百七十餘年前の頑固なる世界の中にもたしかにありた事は、書物に歴然して居ります、凡そ人あれば感情あり、感情あれば歌とか音樂とか云ふ者が、自然に發達して參ります。歐羅巴には一層音樂の著しき顯はれがあった、彼の「ギリシア」の學制、啻に政治のやり方は、支那の古代に頗似して居ります。「ギリシア」には年代の古きに拘らず、美術の思想が發達し、十九世紀の開化が、始めて見出したるに非ずして、古代の思想を段々布演して、今日の隆盛を致しました事が澤山ムりますが、其一に於て音樂の事を「ギリシア」に在て、餘程勢力のある者だと云ふ事を認めて宜しいと思ふ。雅典の有名なる政事家「ソロン」なる人は、國を治むるに音樂が必要なりとし、學者の中の「ピサゴラス」最も音樂の事に意を注いだる者なり又「プラトウ」「アリストートル」の時代には、教育を二つに分け、一を「ジムナシチック」體操一を「ミウヂック」音樂と云ひ、余程此議論が強かった、寸此に於て注意すべきは、此「プラトー」と云ふ人は、音樂は人の性情に強い關係があるに就て、段々人を弱める音樂を取除けなければならぬ、人を快活にする音樂を養はなければならぬ事を論じた事がムります、之に依て考へて見ますると、音樂の勢力は著しき者にて、善くても格別の必要なく、悪くとも害のない者であるならば、斯の如く學者賢人と云ふ人が、この樂器が人を弱める、或は強める等の事を云ふ譯はない。是より音樂其れ自らに就て、愚見を述べ樣と思ふ。

理學　二

○藥鑵の汗

小糸

「生徒」先生、或人の演說の時に、藥鑵や鉄瓶に冷き水を入れると、其外面に滴る程水粒の生ずるは、其鉄瓶などの分子と分子との間の間隙から水が漏るのだと、理學博士と云ふ樣な顏をして申しましたが、眞正ですか。

「先生」ソレハ眞正でありますまい。金屬分子などの結合は水が漏る樣に粗きものではありません、極點に論ずれは、分子と分子との間に多少の間隙はありましやうが、其分子と云ふものは極微のものですから、隨つて互の間にある間隙も亦極微のもので、決して水などの漏る樣な大きなものではありません。若し博士樣の御說が理に適いたるとすれば、其質緻密で面の滑かな器よりも質の粗き素燒の土瓶などにこそ、反て水の漏るとが多い筈でありましよう。

「生徒」私しも虛說だと、或人に申しましたら、其人が決して虛說でない、其理由は、其水が冷たければ冷き程、外面に水を生ずると多きも、湯を入るゝ時は、外面に水を見ると

がない、是れ物躰は冷ゆれば收縮し暖まれば膨張する性質を有するから、冷水を入るれば其分に收縮して、分子間の間隙大きくなり、多く水を漏すも、湯を入るれば、其分子膨張して間隙を塞ぐから、水を漏さないのだと、申しましたが、眞正に左樣ですか。

「先生」左樣な事を云ふ人は、多分博士樣の御弟子でありましやう、素より、物躰には冷ゆれば收縮し暖まれば膨張する性質は、相違なくありますが、之を以て此の現象を解くは、所謂牽強附會の說で全く臆說です。なぜなれば、冷へて分子が收縮すればとて、各分子が互に離れる樣になるものではありません、之と同時に其器の容積が縮小しますから、分子間に水の漏る樣な間隙を生ずるとはない譯です、又た暖りて膨張すればとて、圓い分子が四角になる程壓し合ふものではありません、これも亦た其器の容積が自然大きくなりますから、各分子間に水の漏る程の大きな間隙あるのが、皆んな塞つてしまう樣なとはありません。此の理を實驗的に御話すれば、今ま或る金屬例へば銅の棒の一尺あるものを取り、之を暖むるに若し其物躰は容積を變ずるとなく只だ分子が互に壓し合ふものとすれば、其棒は始終一尺で居る筈なるに、之を百度迄熱すれば、遂に一尺一厘一毛一絲の長さとなり升。夫によつても解りましやう。

「生徒」然らば如何いふ譯ですか。

「先生」夫は恰ど雨の降り又は露の生ずるのと同じ理合です。今玆に冷たき水を入れた藥鑵か水瓶がありますと、其の面に觸る處の空氣は、爲に冷へて濕氣の飽和點が下りますから、濕氣は其面に凝結するのです。それだから水が冷たくつて、其器の面が冷たければ冷たき程、多く凝結するのです、若し御弟子樣の云ふ樣な理屈があるとすれば、冬は氷の出來る程外氣は冷きのに、氷る程冷たき水を入れたらば、内外から冷されて分子非常に收縮し、ドシ／＼水が漏る筈ですが、冬は却つて外面に水の生ずるとなく、夏に於て多きは、甚だ解し難きとでしやう。併し此の現象は少しも理に違がわないので冬は空氣が寒冷で濕氣を含むと少い斗りでなく、其溫度は器面と大した相違がないから、之に觸れても溫度に劇變なく、凝結すべき濕氣を生じませんが、夏は空氣が溫かで飽和點高く濕氣を多く含む故、非常に差ある器面に觸るれば溫度忽ち下り、遂に多くの濕氣を凝結せしむるのです。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

家政

英國女皇陛下のホーム

ゆき子

アルバニー、ガイ女史は居を皇宮の近傍に定む、嘗て女皇陛下が玉歩を移して女史を訪はせ給ふの事を記し、其雜誌に寄す、實に以て美談となすに足る、依て左に略載す。

女皇陛下と一碗の茶

スコツトランドの皇宮を去る十五英里にしてアルバニー、ガイ女史の寓居に至る、風清く、光り涼しき秋の日にあたり、女史嘗て家にあり、陛下此を訪はせられぬ、元來女史は一期（三ヶ月を云ふ）に數度陛下を訪ふの榮を有てり、陛下亦其報として一期に一度女史を訪はせ給ふ事ありき。陛下、女史の居に至らせらるゝや、誠に通常の人の如く、只一人の皇族（婦人）と二人の宮女を伴はせらるゝのみ、陛下を客室に招し、テーブルを隔て女史之に對坐す、隨從の女子は他のテーブルに寄て坐す、食事とて別に甘味のものなく只蒸餅バター菓子茶を供するに過ぎず、されど陛下はいと甘げに味はせらる事を知、陛下は茶を飲ませらるゝ事一碗に至るを見ればなり、止らせらるゝ事、四五十分若くは一時間程なり、食事終るの後、天氣晴快なれば女皇と女史と相伴なふて花園を歩す。

女皇陛下と音樂

陛下は深く音樂を好ませ給ひ、自らも、亦音樂をよくせらる嘗て音樂を學ばせられしより、殊に賞でさせ給ひしは伊國音樂なり、されど近世の音樂の妙所をも知らせらる、そはアルバニー、ガイ女史が陛下の爲めに奏せし時にて知れたればなり、「ロビン、アデーア」及び「家庭の老人」と題する歌曲を奏せし時陛下の眼中涙の湧るを見たり、以て其感情を起させ給ひし事の淺からざりしを見る可し、其他音樂者、技藝者等の巧みなるは一度見聞せらるゝ時は陛下長く忘れさせ給ふ事あらず。

女皇陛下の通信

陛下は早朝に起き出で、食事を終へて後、書簡を讀了し、亦返書を認め、且つ諸般の事務を取らせらる。常に戸外の遊步を好み、天氣晴れし日は紙筆を手にし、園内の天幕を張る所に至り、文書を書かせらる、此處はロクメガール、近傍の山岳、ディーの深谷等の絶景を一望にすべき所なり。事務終はれば馬車を驅つて運動し、若くは行步せらる、午後に至りて亦馬車を驅つて遠行す、晩食の後客を待遇する事一時間半にて陛下は寢に就かせらる、未だ一日も陛下親しく事務を取ら

せられざるなく宮廷錄事の如きも手づから起草し、且つ淸書せらる、日々の受信返信亦少なからず。

女皇陛下の慈愛心

今日英國人民が擧つて陛下を尊敬愛親する所以のもの誠に慈愛親切の心に富ませ給ふが故に外ならず、亦多くの人民中殊に親しく陛下が、交はらせらるゝ者あり、アルバニ、ガイ女史の如き即ち是なり、何れの友人にも陛下は懇切に交はり、面會接遇する所の人には心を用ひ、細微の事までも久しく記臆あらせらる、其訪ふ所の家族、其職業等の事まで忘れさせ給はず、時に依つて其記臆する所を現はさる、斯く見聞する所をよく忘れさせ給はざるが故に、自から交際も親しく、常に人に對して丁寧にあらせらる。

九重奧深き所に閑居せられ、人民と交通するなきは諸國の帝王の常なるに、英國女皇陛下は夙に上下交際の道を開かせられ、親しく萬民の情景を察せらる、こゝを以て上下心を同ふし、下は上を尊親し、上は下を愛慈し玉ふの美風を致せり、右に記する所は只アルバニ、ガイ女史が記する所の大略のみ、尙英國中に斯る事多かる可し。

小說

浮雲胸

第四回　行路難

[illegible]峯子

苦あるが故に樂を知るか、將たまた樂を思ふが故に苦をつらしとするか、一朝境遇を變へ、位置を轉ずる時はさまざまのうきなやみも感ずめり、それ過ぎこし方を顧り見れば樂しき事のみ多く、悲しみは深くも記臆に止らず、却りて現今の位置は苦難のみ思はれて快き事は知るを得ざればなり、平坦鏡の如き行步に於てすら倘且過去の快樂多くして、現今の憂苦多きを知る、况してや責任多からず、心事平安なりし生活より、道を轉じて百事匆忙、千務亂雜たる世路に向ふ者に於てをや、其感ずる所、思ふ事、察するに餘りあり。

今日は九月十日暑氣も少しく薄らぎ、書冊手に取る可き時期近づきぬと、四方田舍の地より。都に上る學生多く見ゆ、浮田なみ子は尙學業修業を爲し、併せて、家庭の政務を學ばんとて亦都に出て、四谷の親戚に寓居す。曾て上京の時、そが父は何か所用ありとてなみ子を伴なひ來り、「久しからずして、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

嫁がん時も來らん、家庭の事を修む可し」と說きすゝめ、なみ子の叔母にもそのよしを精しく托して十五日に歸縣の途に就ぬ、波子の叔母は山下のぶ子とて十年以前國元の官吏山下某に嫁ぎ、某轉任により都に出て來しぞ、さればなみ子の勉學につきよろづ心を用ひて懇ろに世話するなる可し。なみ子は父母の膝下にあらんより心易し抔云ひて打喜ぶ事多し。波子の父が云ひ於ける事なりとて家政の事を務めしめんとすれば波子は「未だ勉學の時なり、嫁がん日は近からず」と云ひ、日夜詩書にのみ心を用ひぬ、されど其讀む所のものは多くは小說の類のみ、叔母のぶ子は之を見て大ひに憂ひ、裁縫家政抔の重んずべきを說けども、なみ子は聞き入る可くもあらず、己が心のまゝにのみ行ひけり。

日は東天に輝き、熱氣漸く緩なる頃門口の方にて郵便脚夫の郵便と呼ぶ聲す、やがて女中が持來るをなみ子は床の中にてうけ取る、裏に九月十八日發、金谷しづ子とあり、さすがに親しき友よりの郵書、如何に喜ばしかるらん、なみ子は獨り打笑みつゝ開封す、中に云ふ事あり。

（前略）御別れ申し候ひしより最早月を重ぬる事と相成申候御まへさまには如何御暮し被成候や、わらは事替て御咄し申上候通り、わらはの幼き頃父母の云ひ名づけなされ候ひし人に嫁ぐ可き旨常々申聞かされ候、學校に學び候ひし頃こそ國には自由結婚など申し候美風行之候由承り、誠の幸福を得んにはかくあるべき事と存居候、さる故に御心の程も知り得らぬ御方に嫁ぎては如何にも悲しく覺え候、されど妾の嫁ぐべき人は誠に溫和寬容の御方と承はり候へは不幸の中の幸ひと喜こび居申候、今年中は裁縫家政などを專ら修め、來らん卯の初つ方結婚の式を擧ぐるよし、父母より承はり候、女子たるものは必らず嫁ぐべきものとは覺悟致し候へども未だ學校を退き候てより月日も經ざる事故身の勤めも果しかぬ可くかとそれのみ心にかゝり申候、學校に在之候ひし頃はいと心やすく日を過ごし候ひしが世の中はいと六かしきものと初めて悟り申候、只世の中の事のみ思ひわづらひ候へば身も弱り、心も消えはつべくと存じ候へども心に於て眞の光明を認め、萬づの事を打まかせ候故悲しみの内に喜こびを爲し、苦しみの時に慰めを得る事に御座候、實に人は薄弱なるものと深く感じ居り候、いと強き神の助けを求むるの必要なるを確認致し候、御まへ樣には未だ妾の如き事はなかる可く候へども早く此の途に御

立ちかへり候事、くれ／＼も望ましく候、何卒御ひまの節には聖書を御しらべ被下度伏而奉希候

妾の手紙は男子の如しとつね／＼父君に叱られ候へども、未だ女子らしき文を得かゝず候

御序の節には御まへさまの御近狀承はり度候、學校のきーちやんは御たつしやにて御歸京遊ばされ候ひしや、時々御訪ひ被下度候、可愛ひきてーちやんは如何被成候や、幼なき無邪氣の御顏が目に見ゆる心地致し候、御目にかゝり度候へども遠くやま川を隔つる身には心ならず候、近日の内に皆さまに書簡差上可く候

愛するなみ子さま　　しづより

なみ子は讀み終りて暫し手紙を傍へに置き、茫然たりしが、やがて起きあがり、朝の粧ひをなし、机に對してありけるが、何をか思ひけん、卷紙を取り出し、かきはじむ。まだ書き終らざるに客ありと女中の告げ來るにより、其室に迎へ、一禮を終へしのみ互ひに打解けて語る。云ふ所親しげなるは同窓の友にや、且語り、且笑ふも樂しげあり、話柄漸く轉じ、しづ子よりの手紙の趣旨を語る。なみ子云ふ樣「妾は決して父母の意に任せて嫁ぐ事はなさず、文明開化の今日にあたり、自由結婚の美風をも知りながら、甘んじて舊習を墨守するは嗚呼の至りとや云はまし、かくては女子教育の必要遂に何處にある、嘆ずべきの至りならずや」と、傍らに聞き居たる一女生、之に應じて「さなり、妾とてもその覺悟なり、今日女學生の責任重し、豈自ら重んぜざる可けんや」と云ふ、なみ子亦語をつぎて「金谷氏にも度々此事を告げしが遂に聞かず、氏は苟めにも神とのみ云ふ、これも神の心にや」と嘲る如く云ひ放ちて高聲に笑ふ、傍らなる女生も共に笑ふ。

客のかへりける後なみ子はまた筆を取り、先きの手紙を書きつゞく、封じて表てに書く所を見ればしづ子への返し文なり、何をか書きつけけん、翌日夕刻しづ子の手元につきぬ。しづ子は讀み終らざるにハンケチもて顏にあてしも屢ばなり、かくて讀み終りて机に伏し、窃かに神に祈りぬ。蓋しなみ子が眞の教へを尊奉せざるを悲しみて祈りしなる可し。春蒔きて秋收め、今年花咲きて來年實のる理なり、しづ子の赤心、如何でか貫徹せざる可き、今日心をとめて祈る所は他日收むるが爲めの種まきなるのみ。

なみ子は未だ宗教の如何に心を傾けず、翌日前より新たに起

草せるものを書きつゞく、今日は第五回として書きはじむ、とは例の小說にや、何が爲めにか心をこめて書くらん、そはある友への手紙にて知らる、其文に曰く、

二伸、近頃つたなき筆もて一篇の小說をものせんと只今起草中に御坐候、何れ脫稿の上は御校閱を願ひ度候、其主意は一烈女千難萬苦を犯し、女權振興の美擧を奏する事に有之候、格別面白き事には無之候へども聊か感ずる所有之候まゝ是非世に公けに致し度存念に御坐候

過日御著はしに相成候小說御趣向、文章共に非凡卓絕の程敬服仕候

事あるに當つて事を知るは凡人のつねのみ、平日にあつて事あるを預じめ知は卓知の人にあらずんば能はじ、同じ友人とて同じからぬ所多ければしづ子はとくより歸鄕後の事杯思ひめぐらして後日必要ならんと思ふ事は心をとめて修めけり、なみ子はさらに此に心を止めず、輕々浮々空論を事とし、某理を吐ひて後の事は嘗て夢想だもせざりき、而して今尙知らず、されど時來るを如何にせん。

ある日國元の父より手紙にてなみ子の許に申しこせしは結婚の一事なり、鄕紳某に嫁ぐ可しとありければなみ子は直ちに應ぜぬ旨を答へたり、父は容易く諾すべくも見えざりしが、數度の手紙の末、なみ子が「是非共尙一年の勉學を許し給へ」と乞ひ、父の言葉に從はざりしかば父は遂に詮方なしとや思ひけん、その事は云はずなりぬ、二月程過ぎけるに亦強く云ひ來しぬ、なみ子もいとゞ困じれて、漸く思ひわづらいの繁き世とは悟りぬ、それよりしづ子の心の程を察し、如何に苦しからん杯慰むる事も屢となりぬ。

「精神一到何事か成らざる可き」と、常に心を勵ましければ、一時の憂苦を感ずれども亦感情薄らぐ時は小說に思ひを勞し如何で名聲を博せんと思ふ心は止まざりけり、此年の十一月頃小說は脫稿せりとてある知人の許に送りて校閱を求め、發兌する事となせしとぞ。

もはや年の暮れにも近くなれば、しづ子は結婚の事の心にかゝり、日々心易くもなかるらん、なみ子の許に手紙を送りけるときは何時も悲しみの心を述べぬ、なみ子も身の事を思ひくらべ、世事意のごとくならず、行路の難きを轉た嘆きけり。

笑草

貴族院傍聽

ふみ子

廿三年が來たならば、是非國會の傍聽に、行かねばならぬ、此世の思ひ出は外にはない。東京へ汽車が通じて、其汽車に乘り、國會の傍聽に行くことが、出來たらば、死んでもゝう心殘りはなひと、孫や嫁に始終語り續け居たる、開化好きの老爺ありけり。處は何處か難波がた、名には定かに聞ねど大阪より、程遠からぬ、田舍の人なりとなむ。昔しは其村にて生きたる節用集と呼ばれつる、ほどの人にて、人相運氣は更なり、灸點の打ち處、朱肉の煉りやうまで、何暗からぬ人なれば、物知りよ智者よと尊とばれ、證文の取換しにも、此人に一應下書を見て貰ひ、若者の喧嘩にも、此人に判決を乞ふととなり居たるほどなれば、村の物知り、己れ一人よと、自らも許し、人も亦、左思ひ居りしとかや。左れど物移り、星變るにつけ、きのふの小供は、今日の大人となり、其むかし此翁に、頭撫でられたる稚子も、今はいかめしき紳士となりて、髭さへ美事にはやしつゝ、名も何の某と、六かしく改り、むかしの梅坊、松公の時の面影は、全く何處へか、消へ失せて、廿四年の元旦に、おこせつる年賀の狀は、奉書に認めて、帝國代議士てふ肩書をさへ添へつれば、實に世の中は三日見ぬ間に、櫻かなとの諺はあれど、斯くも替れば、變るものかと、今更のやうに、己が身の老たるに驚き、顧みれば兼てより期しつる廿三年も夢の間に過ぎ行ぬ、何條今年は、猶豫せらるべきとやはとて、新年早々、一聲の汽笛と共に、東都に向つて出發せり。

昔しの東海道ハ、五十三次なりしかど、今ハ大阪より、東京迄の間には、百何十といふ、停車塲あれば、翁は汽車の止まる每に、窓より顏をさし出して、立札の文字を讀みしかど、五十三次中には聞かざりし名、多きやうなれば、流石に曾て節用集の名を得たる、物識りも、時代後れてハ其甲斐なく、汽車發着時間表によりて漸くに、東京迄の道順を辨へ得たりとかや。是れ此翁が東京の宿屋に就きたる夜、夕餉の膳に向ひながら、合宿の人に語りける歎息話しなり。

かくて此翁ハ傍聽の事を計らんとて、己が村より撰出されたる某といふ代議士の許を訪たるに、折角態々出京せられたる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

事なれば、貴族院をも傍聽して、歸らるべしといはれ、始て國會てふものには衆貴二個の差別あるとを知り、左らば貴族院の方より傍聽したしといひつるにぞ、某代議士周旋して、貴族院議員の去る方に頼み、一葉の切符を得させぬ。翁は喜びやがて、貴族院へ傍聽に行きけるが、いと失望したる、面持にて彼の代議士の許に至り、さていふやう、今の世の物識り達は、如何なる人々かと思ひつるに、年齢凮躰此翁に左まで立勝りたりとも覺へぬ人、三ヶ一ほどもあり、成程外に大名らしき人も、學者らしき人も、澤山ありたれど、今日の相談は、結局り八尺一寸に過ざりしこそ殘念なれど、頻りに掌を撫でゝ、歎息するにぞ、某代議士は、不審に堪へず、成程多額納税議員の中には、貴公の御仲間らしき人もあるべし、されど八尺一寸とは心得ず、如何なるわけにて、八尺一寸とはいはるゝぞと、問ひつるに、彼翁。

「デモ志しやくとしやくとが出て、双方議論した末が、五分々々で濟んだんだもの。

といひしとぞ、此翁が衆議院に到りての評語は無面白からんに聞漏せしは殘念なりき。

隨感

亡き母の聲

川合信水

涙と共に、愁然として、蕭然として、母の柩を送りしより、最早二年を經過したり、吾が母は在さずと雖も、なほ在せり、在さずして在せる母は、陰に、幽に、暗に、默に、耐忍せよ、節儉せよ、愛あれ、剛かれ、男らしくあれ、義の爲めには自らを忘れよ、立派に言ふよりも立派に行へ、とは教え給ふ也。此教ゆる聲たるや、聲の無き聲なり、生前母は吾が前に於て口に言ふと極て少なく、却て行よりして常に此聲を發せり。死後其躰は、落葉敷きたる寺院の裏、苔むす石塔の下にありと雖も、此聲は、益ゝ大に益々繁く聽ゆる也。吾れ此聲の爲めに流涕し、感激せしと幾度ぞ、吾れ此聲の爲めに慷慨し、奨勵せしと幾度ぞ。されど吾は悲しむ、吾が心弱くして、思ふ如くに進まざるを悲しむ、今や思迫りて言ふと能はず、落る涙を拂ふて瞑目すれば、嗚呼……なつかしき母の顔は、吾が前に髣髴として、朦朧として見ゆるなり。嗚呼今ま一度明らかに見るとを得ざるか、皇天上帝よ、願くは吾が痴を憐み給へ、嗚呼願くは吾を憐み給へ。

文學

池袋清風大人批（東京案子子の屋社中）

初雪

前島

○つね〲に見えし遠山雪降れは　ちかくなりぬる心地こそすれ
（あし曳の　の端も　ま　し）

評。趣向新らしそは誰も常に知る所にして未古歌にも點者は見ざれば也初雪の題にはあらず遠山雪なるべし

日高

○めづらしと皆なかむらんみよしのゝ　高根につもる今朝の初雪
（誰か見ざ　玉敷の都大路の）

評。皆ながむらんなどいはゞ多くの人ある處のやう也吉野山の見ゆるあたりは田舍にして人も少なく風雅の人はあらざるべし故に添削にて都初雪とすべし

安藤

〻ありあけの月さやかにも見渡せハ　くまなくつもる今朝の初雪
（の光に　なほ雪白し沖つ島山）

星野

〻雨とのみ思ひけるかな初雪の　とけて滴る軒のたまみづ

評。下句さばかりあしきにはあらず唯限なくつもるは有明の月に見ゆとも…又添削にて月前雪とすべし

みさを

病にかゝりける時

〻來む夏と君にちきりし松島の　遊ひもまたて消えん我身か

評。辭世の詠のやう也

光源氏、花を賞す

柳亭種彥

光氏ハ、籠の簾をうちあけて、大路のさまを見渡したまふに、此家の傍に、板垣をまばらにしなして、椽端の障子をぐわらりとおしひらき、がまの簾の、いと白う涼しげなるに、女のすきかげ、笑ふ聲などきこえければ、如何なるものゝ集るならん。われらとハ見知るものあらじと、籠よりおりてさしのぞけば、座敷も二階ハ奧深からず、ものハかなき住居にて、ふるかたびらのときわけを、板戸へはりしをたてよせたる、垣根も折戸もあをやかに、心地よげにはひかゝれるかつらに、白き花のみぞ、己れ獨り笑の眉開きしハ、何なるかと問ハせたまへば、籠舁くおのこ、あれこそハからすうり。其の名ハ黑き鳥めきて、花ハ白くみは赤く、かゝるいぶせき垣根にのみ、咲き候とこたふるにぞ、げに此わたりハ小屋がち、打ちよろぼひし軒の褄、はひまつはれるくちおしの花の契りや。一ふさを折りて參れとのたまへば、かのおのこハ心得て、との押開けたるあみどのうちへ、たちいれば、年の頃、二十にたらぬ顏よき娘、黄なるすゞしのまへかけし、花にもまさる雪の肌、しろき團扇に打ち招き、これにのせてあげ給へ、花ハ露けくとげ〲しき、つるの茨が美しい、あなたの御手にさはらうぞと、さもおもハゆけに立ち出づる。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

(103) 女子修身鑑（大本四冊合三百廿葉定價二圓 本町三丁目金港堂其他發賣）

山井道子と云ふ人の編述にして、中村敬宇氏が校閲を經たるものと云へり。道子とは何如なる人ぞ、敬宇氏の序文には、彼女生來艱難を閲したりと云ひ、且つ此著をもて能く閨媛を敎ゆるものと推薦せり。吾人一讀するに、さま〴〵の書籍より都合よき箇條を拔摘し、中にハ女學雜誌より採れる所ろもありて、必竟よせ集めに過ぎず。但し編述の体裁に於て稍や意を用ひたる所ろなきにあらねど、妾の心得と云へる二章を陽れに置きて、堂々メカケとなる人の道德とも云ふべきものを論じたるハ、奇怪此上なきことと云ふべし。如此き盲語が能く閨媛を益すると思ふ能ハず、吾人ハ寧しろ其の大ひに女學を毒するとを痛歎す。

○サルベーション、アーミー

救世軍の事を記せる文章ハ、近頃國民新聞に於て、ブース氏が新著「黑英國」の拔萃の拔萃を揭げたるもの、並びに、六合雜誌、福音週報の最も近き號數に於て、軍の大要を敘したるものを良しとす。就中、福音週報の文尤とも味ひあり。

○敎育上の一雜誌

敎育上、勅文禮拜の事を痛論せる前號の社說に對し、正面の駁擊を寄たるものあらず。あづま新聞の社說ハ誤解に出づ。明治會雜誌ハ之と云ふ意味を明にせず。他の敎育上の一雜誌が言へる所に至てハ、吾人顧る迄もなし、何となれば、其筆者ハ自信する所の辭を發したるにあらず、只時好に投じて空大の虛喝を吐たるに過ずと見ればなり、眞面目の讀者ハ誰か之を苦々しきとに思ざるべき。吾人ハ又其雜誌の名を言ざるべし、何となれば、之を言ときハ反て彼を吹聽するとゝなればなり。

普通科の敎師に適し、且つ速記に達したる師範校卒業の女敎師あり、需要の人は本社に向け申込るべし。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

池の水と川の水

ふみ子

母親らしき人に連られて、或る池の傍をぶら〳〵歩行て居る女の子、朝早くから何處へ行つたのでしやう？　手に小やかなる梅が枝の、いき〳〵としたのを持て居るのを見れば、梅見にでも行つたのでしやう？　袂のさきが梅が枝に觸ッて花瓣は二ッ三ッ、ヒラ〳〵と散て、池の中へ落ち升た。子供は惜しそうに、夫れを見詰めて居升たが、母親に向ひ。

「お母さん此池は水がないの？

母親は何心なく

「ナゼ――ナゼ水がないつて、

と却てこちらから問ひ返し升た。子供は小さな指で、池の中を指ざし。

「デモネお母さん、今ネ此花が池の中へ落ち升たけれども、一寸も動かないんですもの、

母親は思はずホヽヽと打笑み、

「能ウーッく御覽なネ、水が氷つてるんだわね、水が濁つてるから一寸と土のやうに見へるけれど、

小供は、やう〳〵氷りしとは分りたれど、重ねて又。

「そんなら、お母さん、なぜ池の水ばかり氷るんでしやう、前刻渡ッた橋の下には、どん〳〵水が流れてたじやあわり升んか。

母親は、猶も笑を含みながら、徐に子供に向ひ。

「ソーネ、同じ水でも、氷るのと、氷らぬのとがあり升ネへ、夫れは池の水には限らないの！ぢつとして居る水は何處の水でも氷るのです、手水鉢の水でも、桶に溜めた水でも――、夫れ水が違ふと云ふのでなく、同じ水なのだけれども、動くと動かないとの違ひですよ。あなたの學問もそうですよ、あの川の水のやうに、少しも休まないで勉強すると、少しも滯らないでどん〳〵と川の流れのやうに進み、先生が何かお尋ねなすつた時でも、行き詰らずに答へる事が出來升が、若し池の水や何かと同じやうに、内にばかりすつ込んで、何の勉強もせずに居ると、てうど水が氷つて仕舞つて、少しも動かないやうに、ちつともお稽古が進み升せぬ。ダカラあなたはあの川

の水の様にどうぞ、いつも〳〵勉强して、ずん〳〵能い人となつて下さい、といひ聞せて居り升た。なんと皆さん、あなた方も、川の水となつて、ずん〳〵進み行き、仕舞に社會といふ大海に出で、、大きな働きをして下さい升か、どうです。

寄書

敢て世の識者に告白す

押川方義
植村正久
三並良
丸山通一
巖本善治

第一高等中學校に於て内村鑑三氏に關する事件起りてより此方世評囂々たり。吾輩の眞心之を默々に附せしむべからざるものあり。併敢て滿天下の識者に告白して其の示教を乞はんと欲す。

一。各小學校に陛下の影像を掲げ、幼少の子弟をして之に向つて、拜禮をなさしめ、勅語を謄載せる一片の紙に向つて、稽首せしむるが如きは、必ず宗教上の問題に問ふて之を論ずべからずとするも、吾教育上に於て其何の益あるかを知るに苦しむ。寧ろ一種迷妄の觀念を養ひ、卑屈の精神を馴致するの弊あるなきかを疑ふ。また如此き處置を以て皇室の尊榮を維持せんと欲するは頗ぶる策の得たるべしとものに非るとを信ず。皇上は神なり。之に向つて宗教的禮拜を爲す云はゞ是れ人の眞心を束縛し、奉教の自由を奪はんとするものなり。帝國憲法を蹂躙するものなり。吾輩死を以て、之に抗せざるを得ず。然れども影像を敬し、宸筆に禮するは、必らずしも如上の意味合にては非るべし。蓋し政治上人君に對するの禮儀として之を爲すことなるべし。果して然らば、是れ宗教上の問題に非ず。教育社交政治上得失利弊の一問題なるのみ。

一。然れども基督教徒に在りて、往々此の事に付き疑惑を抱けるものありて、時に物議を生じたることなきにあらず。是れまた其の故なきにしもあらざるなり。皇室と所謂神道とは抑そも如何なる關係ありや。彼の神道なるものは吾輩之を一種の宗教として見るべきものなるや。賢所御參拜とは如何なるものぞ。毫も宗教の意義を抱含するものに非るか。何ぞ其事の宗教と相類似せるの甚だしきや。陸海軍の將校士官兵卒をして靖國神社に參拜せしむるに當り、或ひは之を以て西洋諸國の紀念祭と同一視するは當れりとせんか。また之を以て宗教的のことと斷言するものあるも今日の場合何を以て之を當らずとするを得んや。日本臣民たるものは時として賢所參拜を仰せ付らるゝとあらん。賢所とは何ぞや（伊藤伯憲法解釋の英文にはサンクチユアリーの語を用ゐられたり）參拜とは何ぞ。毫も宗教的の分子を含まずとすれば可なり。宗教的禮拜の意味を含めるものとすれば、是れ信教自由を認可せる憲法に對して違憲の措置に非ずして何ぞや。徴兵は國民の義務なり、兵士をして神道にて祭れる靖國神社に參拜せしむ。是れ國民に強ゆるに神道を奉ずるを以てするなり。違憲に非ずして何ぞや。

一。從來基督教徒間には是等の疑惑あり故に皇上の影像に禮するが如きとあるに臨み、神官の配布する神符の如き心地し、何となく宗教の臭味あるが如く覺へて之に躊躇したるも、また全く其故なきには非るなり。

事情此の如くなるを以て、左に余等所執の主義を告白し、併せて滿天下有識者の教を請わんと欲す。

一。日本臣民誰か皇室に忠なるとを懷はざらん。誰れかまた之を政治上の君として崇めざる者あらん。此の區域に於て爲すの禮式は、（得失の議論はさておき）基督教徒として敢て不可とする所に非るなり。

一。果して宗教の分子是等の禮式に存するあらんか。吾輩は一切之に與かるとを得ず（假令時ありて謹敬の意を以て其席に列するとあらんも、其の禮式を自らすると能はざるなり）

一。今に於て、學校陸海軍及び宮廷其他國民全體に關する諸禮式より宗教的の臭味を除去するは、皇室の利益、及國家の利益にして、帝國憲法の規定せる當然の義務なり。

吾輩は漫然不敬罪なる語を弄して、此事を論じ去らんとするものに同意すると能はず。敢て微衷のある所を吐露して大方の識者に告ぐ。

名譽天狗の盛岡女子花くらべ批評　天眞生寄

我聞けり此頃便益堂名譽天狗盛岡女子花くらべと云ふ表を發賣せりと直に二錢五厘を投して之を買ひ求め一見するに其編者は狐崎清介となん呼べる人にて學文唱歌養蠶製絲機織編物和裁縫洋裁縫縫箔押繪美貌遊藝の諸欄に分ち妙齡女子の姓名住所及年齡を記載したるものなり嗚呼是れ何等の表ぞ若し女學界の學術技藝を奬勵せんとするの一機關となせるものか我輩は美貌遊藝の二項あるを怪ますんばあらず我等は美貌は天然に屬し人工に訴ふべからざるを信すればなり遊藝を奬勵するの必要を感せざるなり吾をして思ふ所を道はしめんか寧ろ風俗を害するの不祥物と云ふを惜まざるなり何となれば該表はさまで有名にもあらざる婦女子を名譽天狗などと賞して高慢心を養ひ知足心を養ふの恐なくんばあらず加之妙齡女子の年齡住所を記すは只管朝に酒樓を見まひ夕に妓樓を叩くの放蕩子を樂ましめんとするの意に出でたるものにあらざるか美貌遊藝を記せるは何ぞ況んや名家の令孃貴婦人をして卑賤の業を營む藝娼の間に編入し或は遊藝など云ひて浮氣なる事をなす婦人に編入したるは何故ぞ我か、る點より推察して女學界の學術技藝を奬勵するの意にあらざるを將た私利を營まん爲めに編輯したるものなるか若ししからんには利に注意せずして其利を得へき方法其利を得るに他の害ならざるこそ等に注意せられよ古人も云ずはや鳥は食の爲めに死し人は利の爲めに其身を亡ぼすと利を取るに道あり是を他に求めよ若し我想像する所と反對ならんには返答の勞を惜むなかれ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

○天皇の大權

窮するときは則はち曰く、天皇の大權と。聲名を屢ばするもの、何んぞ必らずしも忠臣あらんや。吾人は、大久保、老西鄕の諸先輩より、之を聞けること至つて少なし。

○國是は改進にあり

之れ何人も同意する所ろ、而して亦何人も盡力する所ろなり。たゞ、政府の官員に今丈けの給料を與へ、政府の保護にて成立つ、寄生事業に今丈けの恩を與へざる可らざる乎の一事問題たる耳。國是の議論にはあらず。

○沈默

沈默反つて佳し。理由ある辨解なき時は、沈默と云ふもの理由あり氣に見ゆる唯一の辨解なれ。

○義犬

越前今立郡池田村大字藪田の吉田藤四郎は、其妻と二兒とを伴なひて雪中を行くとき、埋もれ死せり、妻と長女も亦死せり。男澤二郎(四才)は母に負はれ乍ら、辛くも生存し、人々が雪を堀起せる時尙ほ氣息ありき。此は、隨ひ來りたる飼犬が、腹を以て之を温め居りし故と云ふ。あゝ吾人は久しく義人を紹介することを得ず、今や義を說くに犬の事を以てする也。

○議會

議會と政府との取引、今后何如がなるべき乎、雲行甚だ掛念せらる。活氣の人常に云はく、吾をして維新革命の時機に在らしめばと。左れど、今に於て能く大勢の趣むく所を知らざるものは、いつも寢耳に水の音のみを聞くべし。

○救世軍

サルベーション、アーミーの事、近ごろ漸やく邦人が知る所ろと爲れり。願わくは、其精神に則つたる者起らんことを。

○琉球の婦人を歡待せんとす

內地の婦女にて厭足らず、憫れむべき琉球の婦女子迄をも伴なひ來り、不埓至極の醜業を爲さしめんとす、現に新吉原山田樓に五名の有鑑札琉球婦人、無鑑札の同婦人三名あり。而して更に多く募集せん爲め、尙ほ人を遣はすと云へり。あゝ日本の志士は、未だ開化せざる子供の如き異邦人までをも惡路に誘引せんずる不埓ものを許し置くか。俠骨躍れ動け、官人之を放任す可らざる也。

○議會解散

かゝる不吉文字を弄し、切りに流傳せしむる者あり。左れど、政府にもし達眼の士あらば、決してかゝる事は行われまじきとを確信す。今の議員を解散すとも、代り來る所ろのもの果して穩和なるべきか。元來穩和の人ありとも、此時に當つて一怒慷慨の人たらずんばあらず、第二の議會議員亦知るべきなり。

○正々堂々

憲法上の爭論は之を樞密院に諮ふべし。豫算上の異算は殆んど致し方なかるべし、若し經濟の方を得ずとならば、骸骨を請ふて、辭するの外あらざるべし。板垣退助君は八百万圓減額の説を有す。第二の内閣を作るもの必らずしも欠乏せざるなり。

○根底改革

源平の一盛一衰れ、慣れむに堪へたり、寧しろ盛衰記を讀むの心地す。現今の我國を大改良せんと欲するものは、念ひを根底に入れ、深く下層より改革し來るの希望精神あかる可らず。時務は細かに知らざる可らず、然れども大勢は決して放念す可らざる也。

○子供の婚姻

印度に行わるゝ子供婚姻の害は言ふだに恐ろしきほどなり、九才十才の少娘暴りに娶られ、非常の慘酷なる取扱ひを受け、出血大傷して立ち難きもの多し。曩にカルカッタ府のダッシ孃が出來事世人の注目を驚かせしより此方、今や與論大ひに勃興し、印度に居留せる女醫五十五名は連署して、此の惡風の速かに禁止されんとを請願したり。又印度の婦人二千名は、長さ六十尺の請願書に連署連印して、婚姻年齡を十四才以上に制すべきとを、女王陛下に請願したり。我國には、かゝる例しなし、左れど當の孃娘が知りもせず亦判斷もせざるの人に向つて、直ちに之を婚せしむる如きは、多少子供婚姻と趣むきを同ふすと云つべし。

○米國婦人大會

明二十二日より二十五日迄、米國ワシントン府に於て、アメリカ婦人の大會あらんとす。此は三年前新たに設け、種々の婦人會が連合同盟する所ろの者にて、彼の禁酒會も、彼の女權擴張會も、彼の育兒會も皆な之に加入す、三年一度の會合にして、此度は其第二回にあたる。ウイラード女史亦之れが會頭たり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

問答

可愛子

問。忘れ形見の作者若松しづ子女史と、こわれ指輪の作者つゆ子女史の年齢は何程に候や。(南海漁夫、さもえ二氏)

答。若松女史は二十八歳で、つゆ子女史は二十四歳であります。

問。愛山生のお年と、御勉學なされし學校と、學科目とを承はりたし。(香長子)

答。年齢は確かに知りません、二十以上三十以下でありませう、學んだ學校は、東京麻布鳥居坂の東洋英和學校で、學科目は重もに神學であります。

問。元良勇二郎氏著の心理學は、幾册物に候や。(函舘さもえ)

答。一册物です。

問。政治、文學、理財の中、何れにても、一科專修、或は二科以上兼修せしむる私立學校にて、政敎に關係なく、あまり西洋風に傾かぬものを敎へ被下度候。(老措大)

答。兼修せしむるといふ學校は聞きませんが、專修せしむる學校は、英語では、慶應義塾大學部、東京專門學校の政治理財科、及び文學科があります、邦語では同學校の政治科、專修學校の理財科、政治科、明治法律學校の政治科があります、其他によいと思ふ處を聞きません。

問。山田美妙齋主人は、貴社の客員にて候や、又同氏は基督敎の信者に有之候や、信者ならば何れの敎會にお出なさるや伺度候。(芝區秋山とし)

答。同主人は、弊社の客員ではありません、ソシテまだ基督敎の信者でもありません、然し固より賛成家です。

問。私は此頃舊新約全書を讀み初めたるばかりにて、よく敎のとを知らず、就ては研究の助けにする適當の雜誌はなきにや、御伺申上候。(下野金峰生)

答。京橋區出雲町の警醒社から出る六合雜誌と、麴町區三番町福音週報社から出る福音週報がよろしう御坐います、其他にも色々あります。

●當時十五六歳の少年、性甚だ頑にして、兩親も大に困り居る者有之、傳道師などの方にて、一己人にて預り、御世話被下度希望致す旨、小石川岩竹氏より弊社に申來り候、御承諾の御方は弊社まで御答被下度候。

通信

可愛子編

小笠原島通信‖公娼全廢の運動

川合信水 誌

高島炭坑事件以來名を世に知られたる俠骨男兒松岡好一氏頃ろ小笠原島より還れり、氏は一昨年同島に至り、頗る島の事情に通ぜり、今ま氏よりして聞き得たる、小笠原島公娼全廢の運動を左に略記すべし。

●貸坐敷の數　は小笠原島の內、父島に二軒あり、一を岩崎といひ、一を長谷川といふ。

●娼妓の有樣及び貸坐敷の位地　小笠原島は、絕海の地、娼妓逃走の恐なく、隨て其取締規則も極めて不完全なるが故に、娼妓は盛裝濃飾、晝夜の別なく、暇さへあれば、自由に出で行き、農家に、商店に、遠慮なく入り込み、或は笑ひ、或は語り、或は遊びに誘ふ、爲めに遊隋の風、淫靡の習は、益々盛ならんとす。且其貸坐敷は、普通の農家商店と軒を並べてあれば、其大鼓を打つ音、歌ふ聲など、村中に響き渡り、島隣に於ても、よく之を聽く、其不躰裁、不都合極まれり。

●父島と母島　父島は前に云ふ如く貸坐敷あり、而して母島には無し、母島は人民質朴にして儉勤、戶々皆豊かなり、故に內地の人の至るとあれば、之を待すると甚だ優なり、然れども父島に至りては、人民遊隋輕薄、其娼妓を買ふが爲めに、錢廻りも頗る惡しく、隨て內地の人の至れるを、或は瞞着し、或は欺騙しても、錢を得んとするが如きの惡風なきにあらず、一は娼妓あるが爲めに、一は娼妓なきが爲めに、斯の如く、天淵月鼈の懸隔を生ぜり。

●大弊害　此島に於て得る所の給料は、日雇の農夫一日三十錢なり、一ヶ月にては九圓なり、此中より食料として三圓引き去るも、餘る所六圓あり、此六圓の金は、多くは皆娼妓を買ふ爲めに投す、實に惜むべし、農夫既に然り、況んや商人なるや、彼等は皆迷ふて遊び、困難悲痛、身に迫り來るに至る、彼等が當初此島に渡り來るや、其目的娼妓を買ふにあらず、稼がん爲めなり、而して娼妓あるが爲めに、稼ぎし金は不潔なる獸慾の爲めに投し、哀れ當初の思は、泡の如くに消へ行くなり、中には辛苦耐忍して、能く働き、貯金するものあるも、娼妓あるが爲めに、或は三百里の波濤を越へて來り、今日まで苦勞したれば、國に歸る前、骨休めに遊ばんなどゝ、途方もなき妄想、痴思を起し、遂に遊ぶが病み付きとなり、又徒手無一物、內地に歸るとさへ能はざるに至るものあり、且夫れ貸坐敷あるが爲めに、流通金は、此處に集りて、島內に散ぜず、轉じて娼妓仕入の代、家屋粧飾品等の價とありて、內地に入る、金融いよく必迫して、爲めに商業上の不信

用を來し、訴訟又續々として起る、嗚呼其大弊害一に茲に至るか。

●何ぞ無耻なるや　此島は無稅地なり、內地の厄介を蒙むると多し、而して未だ納稅の義務を果すの運びに至らず、他の厄介を脫する場合に及ばずして、はや貸坐敷の如きものを設けて、禽獸の汚樂をなす、何ぞ無耻なるや。

●何故に貸坐敷を設きたるか　之に答ふ者曰く、此島には割合に女子少なし、故に娼妓を置て其不足を補ふと、又曰く此島は人口少なし、故に貸坐敷を設け、景氣をつけて、移住人、出稼人を呼ばんとすと、淺慮なる考、餘りの事に呆るゝ也。されば實際貸坐敷を設てより後の有樣を見るに、男子は彼れが爲めに金を費し、產を破る、既に產を破るが故に、又妻を娶るの餘裕あらざるなり、是に於てか、女子の割合に少なきとは益々甚し、而して子を生ずるとも亦甚だ少なし、其結果は論者が期する所に反對せり、抑々今は滊船の航路も開けたり、若し女子の少きを憂へば、何ぞ內地もしくは、彼の女子の多く餘れるといふ八丈島などより、正しき婦女を連れ來らざるぞ、畢竟茲に出でずして邪を謀る、惜むべし、されど既往は追ふべからず、せめては一日も早く公娼を全廢すべし。

●不埒千萬　貸坐敷營業者の、內地より小笠原島に、娼婦を連れ行くや、中には不埒千萬なる醜を用る者あり、そは小笠原島は直ぐ近しと欺き、或は茶屋奉公に周旋するなどと、詐り而して連れ行き、若し婦女にして違約を憤り、娼となるを肯んぜざるものあれば、或はおどし或は賺し、それにて聞かざれば、汝を載せ來りたる船賃何程なり、是を今直ちに返せと責む、婦女之に困まり、遂に涙を呑んで賤業に就くに至ると、聞く者誰か悲憤せざらん。

●公娼全廢は全島の輿論なり　松岡好一氏は先づ其弊害に付て憤激したり、遂に之を多くの人々に謀る、公娼全廢に贊成する百餘名、因て氏も、昨年三月、其弊害十五ヶ條を列擧して、之を島廳に建議せり、依て島長は村議會を開き、公娼の存廢を議せしに、反對者僅かに三四名贊成者多數にて全廢に可決せり、同五月島長赤川穩助氏、其建議書を携へて、東京府に出で、高崎知事に之を差出せりと聞く、今日心あるものは、誰れも島內廢娼の必要を唱へざるものなし、公娼全廢は實に全島の輿論なり。

●如何になりしか　昨年八月、內地より娼妓四人、小笠原島に到る、其出稼期限を、本年二月として許可し、鑑札を與へたり、十二月に至りて、又八名島に渡れり、巡查某、彼等に其期限の二月迄なるとを聞かせ、醜業をなさざらんとを說諭す、されど前借金ありとて、醜業に就きたり、所謂期限二月は、即ち今月なり、如何になりしか、斷然と之を廢せしか、或は繼續にても出せしか、今月定期船の來るまで　知るに由なし。

小笠原島に於ける公娼弊害の實情斯の如し、我政府よ、願くは御決斷、吾人をして早く全廢の聲を聞かしめよ、若し姑息にして尙は廢せざらば、島內の識人宜しく奮起して之が全廢に盡力すべし、吾人又遙かに應援する所あるべし。

◎米國通信　　塚本ふぢ子

●ウエズレー大學內慈善會　當大學の前卒業生にして當時在日本女教師ワヤトソン孃が我日本國の孤兒貧民を憐まんとて種々盡力せられしが昨年基督祭前に當り同孃よりして米人に向くべき日本製品を買ひ整へ當校に回送せらる因て同孃の校友たちは一日樓上の一室に於て慈善會を催したるに六七百名の學生打連れて買ひ求めたる由。

●皮商ダヒデ、ビ、フエヤーウエザル氏　は昨年十一月十五日死去したり氏はもと一錢の財もなく今より三十六年前渡米ニウーヨルク市に顯はれ爾來出精勉強驚くべき金滿家となりぬ遺言に隨ひ諸大學並に神學校病院等に寄附分配せし金額は二十一億一千万弗ありと（但大學神學校の數は二十箇所也）

女報

可愛子編

●皇后宮陛下御不例　皇后宮陛下は、本年一月初旬より御不例の處同月下旬頃には御快氣に趣かせ給ひしも、尙又本月初旬より餘程熱度を增させられしにぞ、昨今伊東侍醫は朝夕伺候して、專ら藥養を進め參らするやに承れり。

●山縣伯爵夫人　は過る十二日、大磯の別莊より、郷里山口へ向け、汽車にて發途せしが、車中俄の發病にて、乘車に堪へず濱松の停車場にて車を下り、同所の旅亭花屋方へ投宿し、直ちに永田町官邸へ、右の趣電報ありたるに付、同邸にては、早速橋本國手其他二三の人々を去る十三日午前八時、新橋發の汽車にて同所へ差向けらる。

●陸奧農商務大臣の夫人　は去る十六日、令孃同道熱海に赴かれたり。

●福澤捨次郎氏と林きく子　福澤諭吉氏の令息、山陽鐵道會社々員なる福澤捨次郎氏は、去る十月兵庫縣知事林董氏の令孃きく子と、神戶宇治川の常盤花壇に於て、結婚式を行ひたり。

●先頃遺骸を取寄せたる　米國紐育領事、藤井三郎氏夫人の葬式は、去る十二日執行せられたり。

●明治女學校　今夜六時より同校に於て第二回の卒業式あり、普通科生十名、英學撰科生五名、速記科九名卒業す。最后に島田三郎氏の演說あり。

●中村靜子　岡山婦人矯風會長中村靜子は、此度暫らく上京ありぬ、之より三州岡崎へ傳道の爲め趣かるべし。

●渡米の婦女　去る十三日、橫濱より解纜して、米國に赴きたる婦女は、九名なりしといふ。

●結婚と離婚　東京市十五區內に於ける、昨年十二月中の結婚者は七百二十一名

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にして、離籍者は二百七十二名なりき。

●婦人慈善會支會の役員會　近江婦人慈善會犬上支會は、近來大に委靡衰頽の姿ありとて、去八日正午より、彦根大字安清新屋敷町齊覺寺に於て、役員會を開き同會擴張の協議を遂げたるが、熟議の末、是迄、會費一ヶ月十錢以上なりしを、將來會費一ヶ月五錢以上と改むると、及窮民救助の方法、其他數件を決して散會したる由。

●支那に於ける婦人賣買　は二十五年前より始まりたり、同國東京(トンキン)地方にては、惡商人等、人里遠き森の中等にて、婦女及小兒を見る時は、直に捕へて之を引ずり行き、之を支那の商人に賣渡す、現今にては、東京(トンキン)の貧乏婦人を、支那の各地に送り出す者數百餘名なりと、野蠻の極。

●マダム、メテの唱歌　伊國に生れ、米國に人となり、吟客の女王と稱へられたる同女史は、其一唱歌と雖も、非常の價ありて、ボストンの一興行、即ち半月間に、女史のみにて、一万二千三百五十弗を受け、桑港にては、十八日興行間に十六万二千弗、即ち一興行九十弗の割なりといふ。

●米國の慈善家ベーコル夫人長逝す　夫人は今を去ると三十九年前其良人を失ひ、引續て四人の子供までも失ひ、不幸中の不幸に遭遇したるも、中心神を信じ、慈善を樂むが故に、良き友達始終訪問し、平安、和樂、賑々しく暮せしとなり、又夫人は廣く全世界に、神の道の廣まるとを希ひ、印度、支那、土耳其、及び我日本の傳道に熱心し、常に種々の方法を以て之を助けたり、黒奴の解放論起りて、南北大戰爭となるや、夫人は深く北部戰敗者の負傷して病院にあるものを憫み、自ら出張して之を訪ひ、且物品を送て之を慰めたり、後ち黒人の爲めに、又アメリカ土人の爲めに、學校を建つる等の舉は、常に率先して之を助けたり、晩年に及んで、殊に日本傳道に熱心し、故新島襄并米國再遊の砌なども、屢々氏を招待し、厚く禮遇したりとなん、本年一月十四日溘然として逝去せられぬ、享年八十有三歲。

週報

●官令　十日勅令を以て海軍糧食條例中追加の件を裁可公布せらる●十二日同令を以て理事及理事試補服制を裁可公布せらる●十六日同令を以て海軍武官官等表中追加の件を裁可公布せらる。

●宮庭　十日小松親王殿下沼津より御歸京遊ばさる。

●政治　十日衆議院に於て査定案可決硬派の勝利となる●同日貴族院議員神田孝平氏辭職す●十一日又保安條例を實施す●十八日内大臣三條實美公病薨す。

●經濟　二十一日午後一時日本工業會の總會開く。

品名	十二月十八日
白米(一円ニ付)	
一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇四
三等米	一〇八
四等米	一一一
五等米	一一五
正米(一円ニ付)	
越中米	一斗四升六合
美濃米	一四四
尾張米	一四三
肥後米	一四二
一志米	一四〇
雜穀(一円ニ付)	
本貫大麥	二斗二升〇合
上州小麥	一五五
竹林麥	一四〇
梅澤大豆	二一〇
青柳大豆	一九八
吟小豆	一四三
白胡麻	一三〇
黒胡麻	一五〇
鹽(一円ニ付)	
赤穗	二俵六〇
大撫	二七〇
本齋	四〇七
新齋	四三三
醤油(一円ニ付)	
最上	樽八分一厘
極上	九五
上物	一四〇
中〃	一九〇
並物	二四〇
味噌(一円ニ付)	
地製上赤	六貫六〇〇
同紅赤	五、〇〇〇
同白	四、八〇〇
呉綿(九貫目ニ付)	
上入金	二四、〇〇円
並入金	二七、〇〇
無銘	二二、〇〇
呉服織物(一反ニ付)	
御召縮緬上等	八、五〇円
糸織極上	七、〇〇
一樂織極上	八、八〇
結城紬極上	五、五〇
節糸織極上	五、二〇
本八丈極上	六、八〇
琉球紬極上	五、五〇
奉書紬極上	四、〇〇
七々子稀物	九、〇〇
繻珍織極上	二五、〇〇
本國織極上	一五、〇〇
與繻子極上	一〇、五〇
練仙臺極上	八、八〇
花色絹糸好	
生七十匁付	四、〇〇円
同八十匁付	四、四五
同九十匁付	四、八五
同百匁付	五、三五
同小節絹	
生八十匁	三、一〇
同本秩父絹	
生百四十匁	四、四〇円
六丈絹猩々紅	
五十目立並	五、七〇円
同別仕入	六、二〇
白木綿(一反ニ付)	
玉鶴	三反六〇
綾鶴	三九〇
日ノ出鶴	四二〇
若柳	三二五
白梅	四〇〇
製茶(一貫目ニ付)	
山城江州稀頭	二、四五円
同大頭	一、九五
同小頭	一、六五
同中茶	一、一五
狹山稀頭	一、七五
同大頭	一、四〇
同中頭	一、二五
乾海苔(一百枚ニ付)	
洲崎極上々	一、一〇円
大森極上々	一、一〇
深川砂村	一、一〇
大師潮田	八五
上總極上	六五
鰹節(十貫目ニ付)	
薩摩大	一六、〇〇円
伊豆上	一七、〇〇
遠州上	一六、〇〇
房總上	一四、〇〇
土佐大	八、〇〇
城ノ腰上	一六、五〇
水戸磐城上	一二、八〇
南部仙臺	九、三〇
銚子上	一三、〇〇
水油(一斗ニ付)	
地水	八、四〇円
胡麻	九、六〇
荏油	一〇、七〇
桐油	六、六〇
綿油	七、六〇
坂水	九、五五
石油(一函ニ付)	
チヤスター	一、六八円
ブポース	一、六四
ホーキ	一、六八
ロシヤ	一、六八

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●正教新報

二月十五日發行第貳百四十五號壹冊郵稅共金四錢五厘

論説 教宗聖フオチイ師の千週年を記念し併せて東西教會の分離の原因に論及す〇不敬事件を論じて吾正教會の主義を明にす〇無言説教の一片●特別寄書〇爾意基督爲向、是誰之子乎●寄書〇教育上に於ける宗教と道德の効力 教一夕話〇現社會の大勢の變遷〇反動と流行〇塵外の感〇擬雅歌數件●外報〇朝鮮國釜山港通信第一回

雜錄 金言●文苑〇日朝歌〇舊約百詠●志林〇埃及國宗

雜報 ●日本正教會記事〇十數件●彙報〇

發行所 東京神田區駿河臺北甲賀町十三番地 **愛々社**

女子高等師範學校長文學博士中村正直先生閲並題辭 山井道子編述

女子修身鑑 全一冊

半紙本上製函入定價金二圓

目次「卷一」修身大意●教育程度●ベルツ君演説●父母に事ふる道●長幼順序●交際●婦行婦德婦言婦容婦功「卷二」配偶の撰●寡婦心得●夫に事ふる道●舅姑に事ふる道●叔妹及親戚取扱心得「卷三」母親心得●嬰兒教導●女子七八歳よりの教導●男子幼兒教導●繼子を教導する心得「卷四」姑心得●妾心得●乳母心得●下婢心得●家政心得

●中村先生の題辭に我喜茲書出善教被閨媛可以資見聞可以爲內助可以調兒孫との言あれば世の女子たる者必ず一本を座右に置き朝夕の鑑となし賜はゞ獨り一身一家の幸福のみならんや

賣捌 各書林 **發行者** 東京牛込區東五軒町十七番地 **東條春雄**

每月一回刊行 **普通衛生雜誌** 明治二十四年一月二十九日刊行第三卷第一號目次

論説 衛生三慶事……石黒忠悳君●生活……醫學士坪井速水君●鍼治に就て……醫學士江馬賤男君●衛生の進歩其三……醫科大學衛生學教室安原豐也君

新報 結核死亡數●身躰の發育●濾過水の黴菌●貧者の小兒及其疾病●リヨフレル氏の實扶的里論●煮沸飲料水

社説 明治二十四年

雜錄 明治二十三年間衛生事項……M.M.君●食鹽の防腐力……T.Y.君●蕎餅●すゝ竹の實●傳染病豫防消毒心得書

通信 一小溪の衛生實况……美甘光君

彙報 結核新治療法の發明につき特旨研究資金の下賜●流行性感冒●明治二十三年中傳染病の概况●結核新療法●本邦人の躰格●電話器●電氣燈●本所養育院

定價 一冊六錢郵稅五厘半ヶ年前金郵稅共三十七錢●一ヶ年前金同七十四錢

明治廿三年間發行 **普通衛生雜誌合本** 紙數三百八十餘ページ、製本美麗背クロース金文字入、正價一拾錢（製本料共、郵便稅拾錢

目次〔論説〕心神攝養（文學博士加藤弘之君）婚姻に就て（醫學博士大澤謙二君）腸窒扶斯流行時の心得（醫學士笠原光興君）牛馬の肉に就て（醫學博士緒方正規君）腺病質小兒の養生法（醫學士馬島永德君）日本家屋換氣論追加（醫學士坪井次郎君）醫師を賴む心得（醫學士多田貞一郎君）火葬の問題に就て（醫學士古川榮君）花柳病に就て（醫學士江馬賤男君）飲食物の温度（醫學士坪井次郎君）病氣の攝生法（醫學士多田貞一郎君）眼と光との關係（醫學士甲野棐君）石炭の燃燒によりて生ずる害を論す（醫學士古川榮君）精神の養生（杉亨二君）虎列剌病に就て（醫學士馬島永德君）虎列剌病の用心（醫學博士緒方正規君）學童の休暇轉地に就て（醫學士笠原光興君）虎列剌豫防法諭解（醫學博士三宅秀君）虎列剌病豫防消毒の必要（佐々木東洋君）海水浴（醫學士坪井速水君）庖厨外科（醫學士田代義德君）健康及病者諸君に望む（醫學士坪井速水君）物價騰貴と衛生との關係（醫學士古川榮君）衛生の進歩（衛生學教室安原豐也君）衛生家諸君に望む（醫學士坪井速水君）其他〔新報〕八十餘件〔社説〕十三件〔雜錄〕三十餘件〔學會紀聞〕七件〔問答〕十件〔通信〕十八件〔彙報〕九十餘件

東京日本橋區蠣殼町二丁目十四番地 **普通衛生雜誌社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學書類發行

女學雜誌社 編輯

家庭 廉價 子供の談

紙數八十葉　郵税なし　定價十二錢

右は子供の爲になる好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、蟻の君、第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とダヽイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、ましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガヽ。第十七、尤も悪き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮

紙數六十七葉　郵税なし　定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案内の事。散歩、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を過する事などに分ち、西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理

紙數百九十葉　郵税なし　定價廿五錢

右は、月經の事。懷姙の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を說き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和畫案内

紙數百廿葉　郵税なし　定價五錢

右は八木兼辰氏の講述にかゝるものなり

兒育て草

紙數百六十葉　郵税なし　定價二十錢

右は育兒の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々說明し、母として子を育つる總ての心得を悉とく講述したり。

邦文學

紙數百六十葉　郵税なし　定價二十錢

右は同志社教師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に說明したるもの也。

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候まゝ百卷をば僅に二圓五十錢にて前例の如く賣拂ひを生する分金一圓の割にて相そろへ賣捌可申候、其后欠號八十冊にてれも一と通りづゝ買入を要する義にて其內撰び取りは斷はり候、右百號より二百號に至る間には、出版の當時世を驚かしたる、「日本の家族」。「浮雲の細評」。「理想佳人」。「理想の紳士」。「家內經濟の大要」。「男女交際論」。「經濟雜誌記者との論戰」。「島田三郎氏米國よりの女界通信幾多」。「無名の英雄」。「戶內の戰死」。大鳥圭介氏、德富猪一郎氏、田口卯吉氏、光明寺三郎氏等の女子教育論。月の舍しのぶ氏が「哲女の卷」。「將來の和歌」。「將來の日本人民」。森有禮氏の「妻妾論」。「櫻花爛熳」。「滿目漠々」。饗庭篁村氏が最秀の自作小說とする「昔の夢」。「此大沙漠界一人の詩人あれよ」。「繒畫に於ける國粹保存主義」。「犧牲献身」。「詩人」。若松しづ子が「忘れ形見」。等の極めて面白き甚だ益あるものを含めり。

第三版 百人一首講義

上製美本　五十錢　郵税六錢

並製淡装　三十五錢　同　四錢

正月の稽古に宜し　歌留多遊びに宜し　遣物に宜し　詠歌に宜し

女學雜誌社

定價			
一冊。	六錢	郵税。五厘	(但府內無郵税)
十一冊。	五拾八錢	郵税。五厘	(同前)
半年分	壹圓四拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三